



東京上野本店 (The シカゴビル)

OPEN:12:00~19:30 年中無休 (年末年始を除く)
〒110-0005 東京都台東区上野1-12-7
TEL.03-5818-1123 FAX.03-5818-1124
E-mail: chicago@regimentals.jp



シカゴブログ連載中!! <http://regimentals.jugem.jp>

モバイルブログは右のQRコードからアクセスして下さい。

東京上野本店一階に古式銃専門店 The Chicago Gallery もございます。



大阪店 (丸の内ビル 4階)

OPEN:12:00~20:00 年中無休 (年末年始を除く)
〒541-0048 大阪市中央区瓦町1-5-14
TEL.06-6223-9070 FAX.06-6223-9071

www.regimentals.jp

弊社発行雑誌及び弊社ウェブサイトにて掲載の商品画像の著作権は、商品販売者であるシカゴレジメンタルズに帰属します。
私的かつ無償範囲内で複製転載を許す旨の表示がある場合は、事前に弊社にシカゴレジメンタルズの許可
を要します。複製、公衆送信、改変、改題、転載等の行為は著作権法により禁止されています。

Copyright © Chicago Regimentals & Co., Ltd. All Rights Reserved.

定価 300円(税込)

Gazette Vol.16

The Annual Booklet for Deactivated Weapons and
Antique Firearms Collectors

Deactivated Weapons, Detachable Weapons, Ammunition



FN HERSTAL

FN SCAR-L Assault Rifle, CQC Model w/ EGLM
FN P90 Personal Defense Weapon

Chicago *Regimentals* Co., Ltd.

株式会社 シカゴレジメンタルズ

Table of Contents - 目次

Type 22 Murata Carbine.....	Page 03
Type 3 Heavy Machinegun.....	Page 04
Sharps Model 1852 "Slanting Breech" Carbine.....	Page 05
Spencer New Model Navy Rifle.....	Page 06
Winchester Model 1873 Musket.....	Page 07
Winchester Model 1876 Rifle.....	Page 08
Thompson M1928A1 Sub Machinegun.....	Page 09
M50 Reising Sub Machinegun.....	Page 10
Mausers Gew.71 Infantry Rifle.....	Page 11
Gew.71/84 Infantry Rifle.....	Page 12
MP38 Sub Machinegun.....	Page 13
MP40 Sub Machinegun.....	Page 14
Erma ELF SR-100 Sniper Rifle.....	Page 15
Heckler & Koch G41A3 Self-loading Rifle.....	Page 16
Enfield Pattern 1859 Percussion 3 Band Rifle.....	Page 17
Snider-Enfield Mk II** Breech-loading Rifle Presentation Model.....	Page 18
Pattern 1914 Enfield Rifle.....	Page 19
SMLE No.4 Mk I (T) Sniper Rifle.....	Page 20
ZGB Vz.33 Light Machinegun.....	Page 21
Vickers-Berthier Mk I Light Machinegun.....	Page 22
Carcano M1891 Infantry Rifle.....	Page 23
Beretta M1938/44 Sub Machinegun.....	Page 24
Beretta M12 Sub Machinegun.....	Page 25
Beretta BM59 Mark Ital Self-loading Rifle.....	Page 26
Berthier Mle 1916 Infantry Rifle.....	Page 27
MAS Mle 1938 Sub Machinegun.....	Page 28
FA-MAS F1 Bullpup Assault Rifle.....	Page 29
Hotchkiss Universal Sub Machinegun.....	Page 30
Werndl M1867/77 Jäger Rifle.....	Page 31
Wanzl M1862/67 Infantry Rifle.....	Page 32
Steyr AUG Bullpup Assault Rifle.....	Page 33
Steyr AUG A1 Bullpup Assault Carbine.....	Page 34
Swiss Vetterli M1878 Infantry Rifle.....	Page 35
Swiss M1842/59/67 Milbank-Amsler Conversion Infantry Rifle.....	Page 36
Schmidt-Rubin IG89 Infantry Rifle.....	Page 37
Schmidt-Rubin ZIK31/42 Sniper Rifle.....	Page 38
SIG SG510-4 Self-loading Rifle.....	Page 39
Sigw.57 Self-loading Rifle.....	Page 40
B&T MP9-N Sub Machinegun.....	Page 41
B&T APC556-PDW Assault Rifle.....	Page 42
FN SCAR-H Assault Rifle Long Barrel.....	Page 43
FN SCAR-L CQC Assault Rifle w/ UGL.....	Page 44
FN MINIMI General Purpose Machinegun.....	Page 45
FN MINIMI 7.62mm General Purpose Machinegun.....	Page 46
Star Modelo Z-70/B Sub Machinegun.....	Page 47
Star Modelo Z-84 Sub Machinegun.....	Page 48
Portuguese Steyr Männlicher M1896 Carbine.....	Page 49
Portuguese Steyr M1886 Kropatschek Infantry Rifle.....	Page 50
Berdan M1870 (Type II) Infantry Rifle.....	Page 51
PPS43 Sub Machinegun.....	Page 52

Maxim M1910 Heavy Machinegun.....	Page 53
DS39 Heavy Machinegun.....	Page 54
East German MPi-KM Assault Rifle.....	Page 55
East German MPi-AKS-74N Assault Rifle.....	Page 56
Bulgarian AKS-47 (AKKS) Assault Rifle.....	Page 57
Bulgarian RPK-74 Light Machinegun.....	Page 58
CZ Scorpion EVO 3 Sub Machinegun.....	Page 59
CZ 805 BREN Assault Rifle.....	Page 60
Polish RPD Light Machinegun.....	Page 61
Polish SG43 Heavy Machinegun.....	Page 62
FPK Sniper Rifle.....	Page 63
Romanian RPK Light Machinegun.....	Page 64
Danuvia 43M Sub Machinegun.....	Page 65
Danuvia 53M/K1 Sub Machinegun.....	Page 66
Zastava M70B Assault Rifle.....	Page 67
Zastava M76 Sniper Rifle.....	Page 68
Owen Machine Carbine Mk1.....	Page 69
SMLE No.1 Mk III* Rifle mtd. by SAF Lithgow.....	Page 70
Tavor TAR 21 Assault Rifle.....	Page 71
Galil ARM Assault Rifle.....	Page 72
Micro UZI Sub Machinegun.....	Page 73
Mini UZI Sub Machinegun.....	Page 74
Rashed Self-loading Carbine.....	Page 75
Akaba Sub Machinegun.....	Page 76
Vektor LM6 Assault Rifle.....	Page 77
Vektor CR21 Bullpup Assault Rifle.....	Page 78
Type 80 General Purpose Machinegun.....	Page 79
Chinese Type 57 Heavy Machinegun.....	Page 80
Daewoo K2 Assault Rifle.....	Page 81
Daewoo USAS-12 Automatic Shotgun.....	Page 82
SR88A Assault Rifle.....	Page 83
CIS Ultimax 100 MK3 Light Machinegun.....	Page 84
Siamese Mauser Type 46 Rifle.....	Page 85
Siamese Arisaka Type 66 Rifle.....	Page 86
French Lefauchaux Pinfire Revolver by Lefauchaux a Paris.....	Page 87
Belgian Lefauchaux Pinfire Pocket Revolver.....	Page 88
Belgian Lefauchaux Pinfire Revolver by Eugène Lefauchaux.....	Page 89
English Bar Hammer Pepperbox.....	Page 90
Sharps M1863 Carbine.....	Page 91
Albini Conversion Infantry Rifle.....	Page 92
Colt M1849 Pocket Percussion Revolver, 6in. Barrel.....	Page 93
Colt M1849 Pocket Percussion Revolver, 5in. Barrel.....	Page 94
Sharps & Hankins M1862 Carbine, Army Model.....	Page 95
Springfield M1865 Trapdoor Modified Carbine.....	Page 96
Winchester M1866 Carbine, 2nd Model.....	Page 97
Single Shot percussion Navy Pistol by Keitland & Co.....	Page 98
Japanese Military Matchlock Gun.....	Page 99
Japanese Pill-lock Carbine.....	Page 100
シカゴ Q&A.....	Page 101-102
買取/下取りのご案内 - 来店/通信販売をご利用のお客様へ.....	Page 103-104
古式銃の買取/下取りについての流れ.....	Page 105-106
Chicago Regimentals Tokyo Headquarters / Osaka Branch Office.....	Page 107-108

Type 22 Murata Carbine

Type 22 Murata Carbine
二十二年式村田騎兵銃



全長 959mm
口径 8mm×53R
装弾数 8発



Type 3 Heavy Machinegun

Type 3 Heavy Machinegun
三年式重機関銃



全長 959mm
口径 8mm×53R
装弾数 8発



明治22年(1889年)に制式となった日本初の市産連発銃です。制式名称は明治二十二年制定「大日本帝國村田連發銃」で、その名の通り十三年式及び十八年式村田銃を設計した村田経芳少将(当時)により設計されました。本銃も他の村田銃同様に他国の最新型軍用銃を参考に設計されており、オーストリアのKropatschek歩兵銃が元となっています。当時各国では銃身と並行に設けられたチェュープ式の弾倉が一時的に流行しましたが、一旦全弾を撃ち尽くすと装填にかなりの時間を要した他、機構が複雑になるという欠点がありました。本銃はその後二十年式小銃が登場すると、後方部隊用及び教練銃として軍で保管された後、当時の財閥や陸軍の中古兵器を取り扱った泰半組合等を通じて主に中国へ輸出されました。二十一年式村田銃は他の村田銃のように散弾銃化されて民間に出回ることも無く、現存数が極めて少なくなっています。

大日本帝國村田連發銃

東京砲兵工廠小銃製造所

大正3年に旧防軍制式となった、口径6.5mmの三八式包を使用する空冷式の機関銃で、保彈匣から装弾を行います。それ以前の三八式機関銃が銃身の冷却に悩まされたことから、本銃では銃身と銃尾を別部品とし、放熱効率が向上した大型の冷却ファンを設けた構造となりました。本銃は冷風機内部の銃身部分のみを取り替えるだけで容易に銃身交換が可能で、計装部品のコストダウンも図られています。また、機関部や装弾機構についても改良が加えられ、作動の信頼性が高まっています。三脚の前後には兵十三名で運搬出来るように、連搬用の提握を束ね付ける事が可能となっています。本銃はその後、九二式重機関銃や一式重機関銃に主力重機種の座を譲りましたが、それらの基本構造にも本銃のノウハウが受け継がれています。また後継機関銃の生産に時間がかかった事もあり、本銃は生産終了後もしばらくの間運用が続けられました。

フロント/リア・サイトは本体右側にオフセットされて取り付けられています。トリガーは引金タイプとなっています。

写真は必ずすべて無断複製禁止です。

US Sharps Model 1852 "Slanting Breech" Carbine

US Sharps Model 1852
"Slanting Breech" Carbine
シャープス M1852 カービン
(スラント・ブリーチ)



全長 958mm
口径 .52in
装弾数 単発

US Spencer New Model Navy Rifle

US Spencer New Model
Navy Rifle
スペンサー New Model
ライフル (海軍用)



全長 1,195mm
口径 .56in
装弾数 7発

南北戦争時の代表的な後装式単発小銃で、本体下部のレバーを下方に操作する事によって、ブリーチ・ブロックが下降して薬室が開き、薬室後部から紙製またはリネン製薬莖を装填します。ハンマーの cocking 操作はアンダー・レバー操作とは連動しておらず、別に行います。シャープス銃にはスラント・ブリーチ及びストリート・ブリーチと呼ばれる、2種類のタイプが存在し、スラント・ブリーチモデルでは、ブリーチ・ブロックが斜め下へ下降するのが特徴です。本銃は1852年型のスラント・ブリーチモデルで、騎兵隊が戦に出るために本体側面に設けられたサドル・リングのバーが約23cmの長いタイプとなっている他、バット・ストック右側面に設けられた真鍮製のバッチ・ボックスに予備のエンガールや前管を収納可能です。また、ブリーチ・ブロック固定ピンと着脱用レバーは、ハンド・ガード右側面の板バネで固定する方法になっています。



スラント・ブリーチモデルの斜め下方へ下降するブリーチ・ブロック

クリストファー・スペンサーが開発した後装式7連発のレバー・アクション・ライフルで、本体下部のレバーを下方に操作することによってブリーチ・ブロックが下降し、バット・ストック内の管状弾倉から弾薬が薬室に送り込まれると同時に薬莖が本体上部から排棄されます。前、ハンマーの cocking 操作は、アンダー・レバー操作とは別に行います。スペンサー社で製造されたライフル・モデルにはハンド・ガードを固定するバンドが3本取り付けられており、着剣装置の有無で海軍用と陸軍用が存在します。海軍用は銃身下部に着剣装置が設けられており、ヤタガン式銃剣を装着するようになっていますが、陸軍用は南北戦争時の主力小銃であったM1855やM1861と共用のスパイク銃剣を装着するため、追加の着剣装置は設けられていません。1865年に登場した改良型のスペンサー銃はNew Modelと呼ばれ、銃身後部上方に「N.M.」の刻印が打たれているのが特徴です。



メーカ刻印及びバット刻印がレシーバー上面に入っている他、銃身後部上面にNew Modelを意味する「N.M.」の刻印が見られます。

写真の他はすべて写真複製です。

US Winchester Model 1873 Musket

US Winchester
Model 1873 Musket
ウィンチェスター M1873
マスケット



全長 1,242mm
口径 .44in.
装弾数 17発



US Winchester Model 1876 Rifle

US Winchester
Model 1876 Rifle
ウィンチェスター
M1876 ライフル



全長 1,230mm
口径 .45in.
装弾数 15発



M1873はウィンチェスター社製レバーアクションの最もポピュラーなモデルで、センターファイア式の弾薬を使用するために、旧来のM1866では直撃型であったフレームがM1873からは鉄製へと変更されました。基本構造はM1866とはほぼ同様ですが、ダストカバーの採用など若干の改良がなされています。M1873マスケットは銃身長がライフル・モデルよりも6インチ長く、着弾が可能となるため銃身が銃床から10cmほど突出しています。鉄製はソケット型で、ブロック状のフロント・サイト基部に固定する構造となっています。リア・サイトは軍用タイプのラダー・サイトとなっています。M1873マスケットはラウンド・バレルのみ生産され、チューブ・マガジンはライフル・モデルより3発多く装弾可能となりました。マスケット・モデルはM1873の総生産数の約5%の約36,000挺しか生産されておらず、二種類のモデルの中で生産数が最も少なくなっています。



鉄製のフレーム内側面には取り外し可能なサイド・ブレードがネジ留めされています。

ウィンチェスターM1873は、.44、.38、.32口径など使用弾薬の異なるモデルが各種製造されましたが、いずれも拳銃弾であり、単発式のライフルに比べて遠距離射撃時の威力不足が欠点となっていました。そのため、M1873の機関部を大型化して.45-60 WCE弾を始めとするライフル弾を使用可能としたウィンチェスターM1876が開発されました。M1876はフィデルファイアで行われた合衆国独立100周年記念祭に出品されたため、センテニアル(Centennial)の別名があります。M1876には製造時期により大きく分けて三種類のバリエーションが存在し、1stモデルでは銃床にカバーが装備されていなかったが、2ndモデルからは銃床にカバー用のレールがフレーム上面にネジ留めされて銃床にカバーが追加されました。最終型の3rdモデルでは、銃床にカバー用のレールが削り出し加工による一体成型へと変更されました。M1876は1876年から1897年の間に僅かに63,871挺が製造されたに留まりました。



使用弾薬の変更に伴い機関部がM1873に比べて大型化されています。

写真の数はすべて無断複製禁止です。

US Thompson M1928A1 Sub Machinegun

US Thompson M1928A1
Sub Machinegun
トンプソン M1928A1 短機関銃



全長 855mm
口径 .45in.
装弾数 20/30/50/100発

US M50 Reising Sub Machinegun

US M50 Reising
Sub Machinegun
US M50 (レイジング) 短機関銃



全長 889mm
口径 .45in.
装弾数 12/20発

トンプソン短機関銃は、「個人が携行可能で機関銃のように連射できる武器」というコンセプトから開発が始

まりました。当初は新たなコンセプトの兵器ゆえ、軍などの評価は決して芳しいものではありませんでしたが、皮肉にも禁酒法時代のギャング達の使用により有効性が証明され、その後米軍もニカラグアでの実戦で有効性を認めました。さらに第二次世界大戦の幕開けとともにトンプソン短機関銃は本格的に各国軍に採用されるようになります。トンプソンM1928A1短機関銃は、米陸軍によってそれまで限定的に調達が行われていたM1928短機関銃を1938年に標準制式品として制式採用したモデルです。ハンドガードが従来のバーティカル・グリップ付の物からストレート・タイプとなった他、ハンドガード及びストック下部にスリング・スイベルが追加されました。M1928A1は米国外にもライセンス法に基づき各国に供給されました。



レシーバーには米国のパテント制の他、商標を象ったトンプソンのロゴが打刻されています。

第二次世界大戦中、米海兵隊ではトンプソンM1A1短機関銃の需要に供給が追いつかなくなり、その供給不足を解消するため陸軍とは別ルートでの装備調達を両策し、安価で高性能な新型短機関銃の開発を進めていました。ハーランド・リチャードソン社は1940年に試作銃の開発に成功し、翌年の選考テストにおいて軽量な本体と高い命中率が評価され採用となりました。しかしながら本銃は精巧すぎる構造のため砂や埃に弱く、度々不具合が発生し、その後トンプソンM1A1が大規模生産できるようになると次第に前線からその姿を消していきまし。本銃は1941年から1945年までの間に10,000挺以上が製造され、国内の警察の他、一部がカナダ軍やソ連軍でも使用されました。また本銃の派生モデルとして、ワイヤー製の折り畳み式ストックを装備し、内部の構造を単純化させたレイジングM55短機関銃も開発されました。



銃床下部には機関部と銃床を固定するスクリューのノブが設けられています。

写真はすべて無動作状態で撮影。

Mauser Gew.71 Infantry Rifle

Gew.71/84 Infantry Rifle

Mauser Gew.71 Infantry Rifle
モーゼル Gew.71 歩兵銃



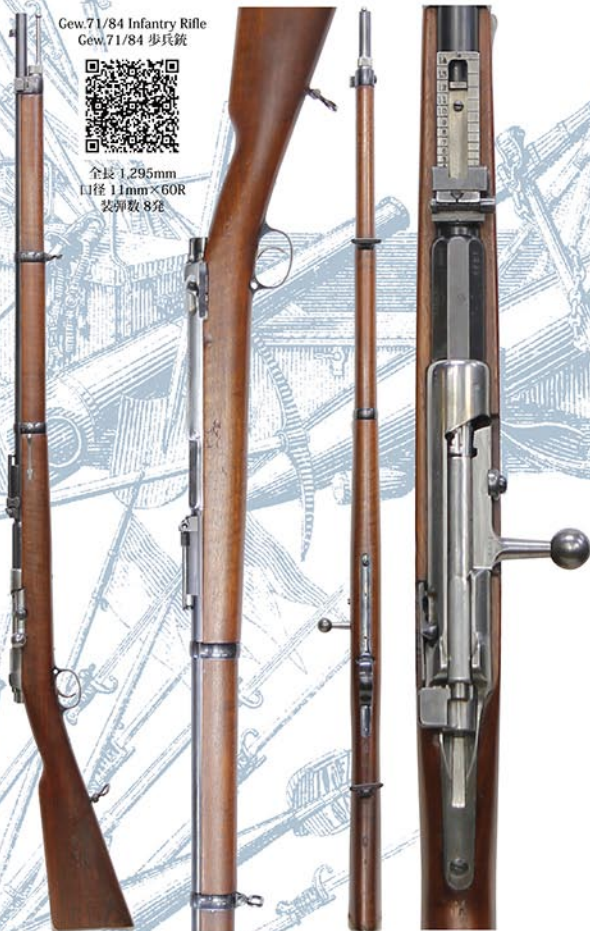
全長 1,350mm
口径 11mm×60R
装弾数 単発



Gew.71/84 Infantry Rifle
Gew.71/84 歩兵銃



全長 1,295mm
口径 11mm×60R
装弾数 8発



ドイツが初採用した、金属製薬莖を使用するボルト・アクション・ライフルで、口径11mmの黒色火薬のカートリッジを使用します。本銃はカール・モーゼルとヴィルヘルム・モーゼルのモーゼル兄弟が開発し、1871年にプロイセン採用制式となりました。1871年にプロイセン王國が普仏戦争に勝利すると同時にドイツ帝國が成立したことから、モーゼルGew.71歩兵銃はバイエルン王國を除く全ドイツ諸國の制式小銃となりました。ドイツ統一後もバイエルン王國は独自のM1869ウェルゲー歩兵銃を装備しており、1877年になって初めてGew.71歩兵銃を制式としました。本銃は単発式であったものの、ボルトを90度回転させて閉鎖する構造は、近代ボルト・アクション・ライフルの基礎となりました。また、レバーを左右に回転させて切り替える所謂モーゼル・アクションのセーフティ・レバーは、モーゼルGew.71小銃の開発時に初めて用いられました。



ボルトはレバー右側面のボルト・ガイドの切り欠きとボルト・ハンドル基部によって閉鎖されます。

各国制式小銃の連発化の流れに従い、モーゼルGew.71小銃にオーストリアの銃器設計者アルフレート・フォン・クロバチェクが1884年に開発したチューブ・マガジンを組み込んで8連発としたモデルです。弾倉内には、ボルトを開いた状態で機関部上部よりマガジン・キャリアを押し下げながら弾薬を一発ずつ装填します。基本的な構造はGew.71小銃と同様で、ボルト・ガイド・リブが唯一のロック機構所となっており、ボルト側面のネジ及びワッシャーを取り外す事によってボルトが3分割になる構造も同じですが、Gew.71/84ではエジェクターが追加されています。Gew.71/84は1886年から1889年の僅か3年間の間にドイツ国内の各兵工廠及びモーゼル社で約90万挺が生産されました。その後、フランスで世界初の無煙火薬を使用する連発式小銃であるMle 1886/93が登場したことから、ドイツでも1888年に7.9mm M/88弾を使用する新型のGew.88歩兵銃が採用され、Gew.71/84はその主力小銃の座を譲る事となりました。



トリガー・ガードが毀裂へと変更されている他、リア・クリンクス・スライダがバット・プレート下部に移された個体も見られます。

MP38 Sub Machinegun



MP38 Sub Machinegun
MP38 短機関銃



全長 840mm(623mm)
口径 9mm×19
装弾数 32発

MP40 Sub Machinegun



MP40 Sub Machinegun
MP40 短機関銃



全長 840mm(630mm)
口径 9mm×19
装弾数 32発

エルマEMPをベースに試作されたエルマMP36の構造を簡略化した短機関銃で、1938年にドイツ軍に採用されました。鉄製パイプとプレス製部品で構成された下方折り畳み式のストックが装備されている他、マガジン・ハウジングを射撃時のフォア・グリップとして利用する事が可能である等、当時としては大膽なコンセプトが取り入れられていました。射撃機能はフルオートマチックのみで、リコイル・スプリングが伸縮式のユニットに収納されているのも特徴です。レシーバーは鉄材からの折り出しによって製作されていたが、これは生産にあたり非常に手間の掛かる物でした。また、鋳造アルミ合金製のグリップ・フレームは、ドイツ国内でアルミニウムの調達が難しい事から生産上のネックとなっていました。MP38はレシーバー・皮面のフルードや、マガジン・ハウジング両側面に開けられた円形のがが外観上の特徴となっています。



本体のレシーバー・エンド・キャップ上面には製造年を示す「1940」の刻印の他、エルマ社製を示す「27」の刻印が入っています。

第二次世界大戦中にドイツ軍が使用した、MP38短機関銃の改良型です。MP38ではレシーバーを鉄材からの折り出しで製作していた他、グリップ・フレームに鋳造アルミ合金製でしたが、MP40では生産性を向上させるためにレシーバー及びグリップ・フレームに鋼板プレス加工を採用しました。これにより製造工程が簡略化された他、希少資源であったアルミニウムの節約にも繋がりました。また、MP38では銃を落下させた際にボルトが前面位置から跳ね上がった状態に陥る危険性がありましたが、1940年後半にコッキング・ハンドルを内側に押し込む事によりボルトを閉鎖位置で固定するフィワード・ロック・セーフティが開発され、1942年以降に製造されたMP40から本格的に装備されるようになりました。1940年頃にエルマ社及びステアー社で製造された初期型のMP40では、マガジン・ハウジングの表面がリブのない平坦な形状となっています。



本体のレシーバー・エンド・キャップ上面には1943年ステアー製を示す「buz 43」の刻印が入っています。

写真はすべて所有物実物です。

Erma ELF SR-100 Sniper Rifle

Erma ELF SR-100 Sniper Rifle
エルマ ELF SR-100 狙撃銃



全長 1,260mm
口径 7.62mm×51
装弾数 10発

Heckler & Koch G41A3 Self-loading Rifle

Heckler & Koch G41A3
Self-loading Rifle
HK G41A3 自動小銃



全長 990mm(800mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発

ドイツのエルマ社が主に対テロ作戦に従事する特殊部隊向けに開発したボルト・アクション・ライフルで、銃身、弾倉、ボルトを交換する事により、.308 Winを始めとする三種の弾薬に数分で対応できる画期的なシステムを有していました。銃身はフリー・フローティング状態でレシーバーに固定されており、六角レンチを使用してロックを解除し、銃身を前方に引き抜くだけで異なる口径の銃身と交換が可能です。また、マガジンは銃床の両側面に設けられたボタンのどちらかを押してもリリースできる構造になっています。銃床の素材は強度があり過度に影響されにくい合板製で、各部の調整が可能になっています。本銃には通常はソアイスまたはシュミット&ベンダー社製の10倍スコープ等が装着されていました。SR-100は非常に高価でありながらも極めて高い命中精度が評価され、KSKやGSG-9を始めとするヨーロッパの特殊部隊によって使用されました。



ストックの全長他、バーム・シヤルプやナーク・レスト、バト・ブレード等を装着可能です。



ドイツHeckler & Koch (HK) 社が開発した、5.56mm×45 NATO弾を使用する自動小銃で、同社のGew 3シリーズと同様に反動利用式のローラー・ディレイド・ブローバック方式で動作します。当時HK社では既に5.56mm口径のHK33シリーズを生産していましたが、軍用としては小型で耐久性に疑問が持たれたため、Gew 3と同じサイズで再設計が行われました。NATO軍の主力である米軍のM16と共用可能なマガジンや、M16と共通の機能であるボルト・フワード・アシスト、排莖口カバー、三点バースト機能等が用い込まれています。本銃の耐久性と良好な命中精度は高い評価を受けましたが、5.56mm口径の自動小銃としては重みがあつた他、高い製造コストも軍用として大きなネックとなりました。そのため、最終的には武装警察等に少数が納入されに留まりました。本銃は同じHK社製のMSG90狙撃銃と共用のスコープ・マウントを使用し、Gew 3より低い位置でセレクトするにはセミフル・オートマチック射撃に加えて3点バースト射撃のポジションも設けられています。



写真の銃はすべて無効化銃です。

Enfield Pattern 1859 Percussion 3 Band Rifle

Enfield Pattern 1859
Percussion 3 Band Rifle
エンフィールド P1859
3バンドライフル



全長 1,383mm
口径 16.5mm
装弾数 単発



Snider-Enfield Mk II** Breech-loading Rifle Presentation Model

Snider-Enfield Mk II**
Breech-loading Rifle
Presentation Model
スナイダー・エンフィールド Mk II**
紙装英後装式小銃
(プレゼンテーション・モデル)



全長 1,263mm
口径 15mm
装弾数 単発



1857年から1858年にかけて発生したインド大反乱で現地人傭兵による反乱軍が敗北した後、軍部は現地人傭兵に対して英国市販兵が使用する.577口径のエンフィールドP1853小銃の代わりに、射程及び威力の劣った小銃の支給を検討しました。その結果、外観は英軍制式小銃であるP1853に近いものの、実際にはライフリングのない.656口径のマスケット銃であるP1858小銃の導入が決定されました。この小銃は、P1853小銃が500ヤード以上の有効射程を有していたのに対して、僅か50ヤードの有効射程しかなく、リアサイトの形状も調整機能が省略されたシンプルなものに変更されていました。P1859はP1858の改良型で、銃身が強化された他、フロント・サイトの形状が変更されました。銃身部分に装着する鉄剣は、銃身の強化に伴い銃身の外径が大きくなった為、取付け部の内容が広げられました。P1859小銃は約14,000挺がエンフィールド造兵廠で生産されたと考えられています。



本銃体のロック・プレートには1864年エンフィールド造兵廠製を示す刻印の他、インド向けであることを示す刻印が入っています。

ボクサー式紙装英後装式小銃で、前装式のエンフィールド小銃に米国人のJacob Sniderが開発した後装システムを追加した物です。銃身後部に銃番により開閉するブリーチ・ブロックが追加され、その内部に組み込まれた撃針を撃針で叩く構造となっています。雇われたスナイデル銃には大きく分けてMk IからMk IIIまでの3タイプが存在し、さらにその中に細かなバリエーションが存在します。Mk I及びMk IIは既存のエンフィールド銃からの改修型で、Mk IIIは元々スナイデル銃として新規に製造されたタイプです。Mk II**はスナイデル銃の中でも最も一般的なタイプで、従来モデルからエキストラクターやブリーチ・ブロック前面、ブリーチ取柄部の形状が変更されました。また、フレイミング・ビン・ニッブルが僅かに短縮され、ハンマー先端も丸んだ形状に変更されました。本品は19世紀半頃に将校の私物用として特別仕上げが施された品です。



ロック・プレートにはD.H. Wallis, of Wigan & Carlisleを示すメーカー刻印が入っています。

Pattern 1914 Enfield Rifle



Pattern 1914
Enfield Rifle
P14 小銃



全長 1,176mm
口径 303in.
装弾数 5発

SMLE No.4 MkI (T) Sniper Rifle



SMLE No.4 MkI (T)
Sniper Rifle
SMLE No.4 MkI (T) 狙撃銃



全長 1,128mm
口径 303in.
装弾数 10発

当初では303ブリティッシュ弾に代わる新型のリムレス弾薬を使用するP13小銃が開発されましたが、これらの供給が追いつかないまま第一次世界大戦が勃発した為、供給の逼迫を避ける目的で従来の303ブリティッシュ弾を使用出来るようにP13を再設計したP14が開発されました。しかしながら、303ブリティッシュ弾を使用する小銃としては既にSMLE小銃の生産ラインが整っており、P14の生産ラインを確保する事は困難であった為、英国政府はP14を米国の銃器メーカーに生産させる契約を取り付け、ウィンチェスター・レミントン、そしてレミントンの子会社であるエディストンの3社が生産を行いました。その後、1917年には英国でのSMLEの供給は軌道に乗り、米国におけるP14の生産は縮小からキャンセルへの流れとなりますが、後に一次大戦に参戦した米国防衛国のM1903小銃の不足を補う為に、P14を30.06弾仕様に改良したM1917小銃を使用しました。



大型のリア・サイト・ガードや「dog leg」(犬の脚)と呼ばれる独特な形状のボルト・ハンドルが特徴です。

1942年に英国に正式採用された狙撃銃で、SMLE No.4 MkI小銃の中から精度の良い個体を選び、3.5倍率のNo.32スコープ及びその取り付け用ブラケットや木製マーク・ピースを取り付けた物です。No.32スコープは、1942年に採用されたMk1から1944年のMk3まで各種バリエーションが存在します。尚、元々SMLE No.4 MkI小銃のリア・サイトに設けられていたピープ・サイトは、スコープに干渉しないよう削り落とされています。SMLE No.4 MkI小銃から本銃への改修は、英国内では主にHolland & Holland社で行われた他、カナダのオンタリオ州ロング・ブランチにあったSmall Arms, Limited及びCanadian Arsenals Limitedでも製造が行われ、それらの大半は英軍用として供給されました。SMLE No.4 MkI (T)狙撃銃は、その後7.62mm×51 NATO弾を使用出来るように同銃を改修したL42A1狙撃銃が形式となった1970年代初頭まで第一線で使われました。約1,080挺のSMLE No.4 MkI (T)及O.N. 4 Mk I (T)狙撃銃がL42A1に改修されたと言われています。



本銃体のストック・カラー左側面には英兵シャーリーのバーミンガム・スモール・アームズ・ファクトリーを示す「M47C」の刻印が入っています。

写真はすべて撮影用試写です。

ZGB Vz.33 Light Machinegun

ZGB Vz.33 Light Machinegun
ZGB Vz.33 軽機関銃

全長 1,160mm
口徑 .303in.
装弾数 30発



Vickers-Berthier Mk I Light Machinegun

Vickers-Berthier Mk I
Light Machinegun
ビッカース・バーシエー Mk I
軽機関銃

全長 1,240mm
口徑 .303in.
装弾数 30発



第一次世界大戦後の1920年代、英軍はそれまでの主力軽機関銃であったルイス軽機関銃に代わる新たな軽機関銃のトライアルを開始しました。1930年代に入るとチェコ製のZB Vz.26の改良型であるZB Vz.27軽機関銃（後に更なる改良型のZB Vz.30軽機関銃）を新たに候補に加えてトライアルが行われ、最終的にはこのZB系軽機関銃に改良を加えた物がブレン軽機関銃として英軍に制式採用されました。ZGB Vz.33はこのトライアル過程の中で1933年に試作されたモデルです。ZGBとはチェコのZB（ズボヨフカ・ブルーク）及び大英帝国を表すGBを組み合わせた物です。ブレン軽機関銃のプロトタイプは最初期のZB Vz.30から最終型のZGB Vz.34 モデル4タイプ2まで数種類が試作されました。ZGB Vz.33にはモデル2及びモデル3と呼ばれるタイプが存在し、モデル3ではレシーバー側面に光学サイト用ブラケットが追加された他、ガス・シンダーの形状も変更されました。



リア・サイト調整用ダイヤルはZB系軽機関銃と同様、マガジンハウジング側面に設けられています。



フランス人のベルチエーが設計し、イギリスのビッカース社で生産された軽機関銃です。本銃は元々米陸軍が1917年に性能テストを行い、一度は制式採用が決定していましたが、結果的に生産設備の準備が第一次世界大戦には間に合わず、実質的な生産は行われませんでした。その後、1925年にイギリスのビッカース社が本銃の製造権を買い取り、ルイスガンに代わる軽機関銃として英軍のトライアルに提出されましたが、最終的にはブレン軽機関銃が採用されました。本銃は英軍制式とはなりませんが、インド派遣軍で制式採用されて対日戦にも投入され、インドのインナーポール造兵廠でも量産が行われました。また、英軍においても極少数が特殊部隊や偵察部隊で使用されたと言われています。本銃は他にも諸外国に輸出され、第二次世界大戦時にはソ連にも輸出が行われました。本銃の機構は後にビッカースKガンに受け継がれました。



マガジン挿入口には回転式のダストカバーが装備されています。マガジン・リリースレバーは後に折り畳み可能です。

写真はすべて写実可能なものです。

Carcano M1891 Infantry Rifle

Carcano M1891
Infantry Rifle
カルカノ M1891 歩兵銃



全長 1,290mm
口径 6.5mm×52
装弾数 6発



ベテューリ小銃の後継として1892年5月に採用された、イタリア軍初の無煙火薬を使用する制式小銃で、トリノ陸軍工廠でサルヴァトーレ・カルカノ技師によって開発されました。使用弾薬はベテューリ小銃用の10.4mm弾に比べて大幅に小口径化された6.5mm×52マンリッカー・カルカノ弾で、小口径化に伴い歩兵が携帯可能な弾薬量が増大しました。機関部の構造はドイツのGew. 88の影響を強く受けたコックオン・オープニング方式で、弾倉はエンブロッカー・クリップを使用するマンリッカー方式を改良した物が用いられています。クリップは上下対称のデザインとなっており、上下どちらの向きでも装填が可能です。また、クリップから肩撃弾が引き抜かれると、空のクリップがマガジンハウジングの下部から排出される構造となっていました。ボルト・スリーブにはファイアリング・ピン及びボルトをロックする安全装置が設けられています。



本銃体の薬室上面にはTermini工廠で製造された事を示す印が入っています。

Beretta M1938/44 Sub Machinegun

Beretta M1938/44
Sub Machinegun
ベレッタ M1938/44 短機関銃



全長 796mm
口径 9mm×19
装弾数 10/20/30/40発



ベレッタM1938短機関銃は1938年にイタリア軍制式となった短機関銃で、前後2本の引き金によってセミ/フル・オートマチック射撃の切り替えが出来るユニークな設計となっています。ベレッタM1938/42はM1938の改良型で、製造コストや本体重量軽減のためバレル・ジャケット及びバヨネット・ラックが廃され、銃身やハンドガードが短縮されている他、プレス加工の導入も行われています。M1938/42では放熱用のフルードが銃身表面の軸方面に入っていましたが、その後となる省略型であるベレッタM1938/44が開発され、銃身がフルードの省略された通常のラウンド・バレルに変更されました。これらのベレッタM1938シリーズはイタリアの他にも、ルーマニアやイタリア降伏後に武装解除を行った駐留ドイツ軍など枢軸国で使用されました。また、戦後もModello 1と改称されながら再生産された他、Modello 2からModello 5までの更なる改良型も製造されました。



レシーバー上面にはシリアルNo.に加えて、「P. BERETTA Gardone V.T. CA. Mod. 38/44 Cal.9」のモデル名が印が入っています。

写真はすべて無作動機銃です。

Beretta M12 Sub Machinegun



Beretta M12 Sub Machinegun
ベレッタ M12 短機関銃

全長 655mm(419mm)
口径 9mm×19
弾薬数 20/32/40



1959年にベレッタ社で開発され1961年にイタリア軍が制式採用した、9mm×19 パラベラム弾を使用する短機関銃です。作動方式はオープン・ボルト方式のシングル・ブローバックで、銃本体はプレス加工と溶接による生産性に優れた設計がなされており、小型ボルトの採用により全長の短縮を図っています。また、引き金をロックするマニュアル・セーフティに加えて、トリガー及びボルトをロックするグリッパ・セーフティが装備されています。ストックは本体右側面に折り畳み可能なワイヤー・ストックが装備されていますが、初期には着脱式の本製パッド・ストックを装備したモデルも少数製造されました。尚、M12ではマニュアル・セーフティ及びセレクトターはそれぞれが独立した貫通式のボタンとなっていますが、改良型のM12Sではマニュアル・セーフティとセレクトターの機能を統合したレシーバーに変更されました。



レシーバー左側面にはメーカー名や口径、シリアルNo.が打刻されています。

Beretta BM59 Mark Ital Self-loading Rifle

Beretta BM59 Mark Ital
Self-loading Rifle
ベレッタ BM59 Mark Ital
自動小銃



全長 1,095mm
口径 7.62mm×51
弾薬数 20発



イタリア軍が制式採用したM1ガーランドの独自改良型で、使用弾薬を7.62mm×51 NATO弾へと変更して給弾方式を着脱式のマガジンとした他、フル・オートマチック射撃を可能としたモデルです。当初BM59の生産は、イタリア軍が保有していた既存のM1ガーランドを改修する形で行われましたが、その後ベレッタ社による新規製造に移行しました。BM59には各種のバリエーションが開発されましたが、Mark 1の発展型であるMark IIはイタリア陸軍の要求仕様に合わせてモデルで、コンベンセーターと着脱ラグを兼ねたライフル・グレナード発射器が組み込まれているのが特徴です。また、これに伴いガス・カットオフ・スイッチ兼用のグレナード・ランチャー・サイトが追加されています。その他、トリガー・グループにはウィンター・トリガー機能が内蔵されました。BM59はイタリアでは1990年にベレッタAR70/90自動小銃に更新されるまで使用されました。



米国が買収したM1ガーランドから改修された個体には、レシーバー後部に米国のメーカー刻印が一部残されています。

写真の銃はすべて無許可複製です。

Berthier Mle 1916 Infantry Rifle

MAS Mle 1938 Sub Machinegun

Berthier Mle 1916
Infantry Rifle
ベルチエ
Mle 1916 歩兵銃



全長 1,320mm
口径 8mm×50R
装弾数 5発

MAS Mle 1938 Sub Machinegun
MAS Mle 1938 短機関銃

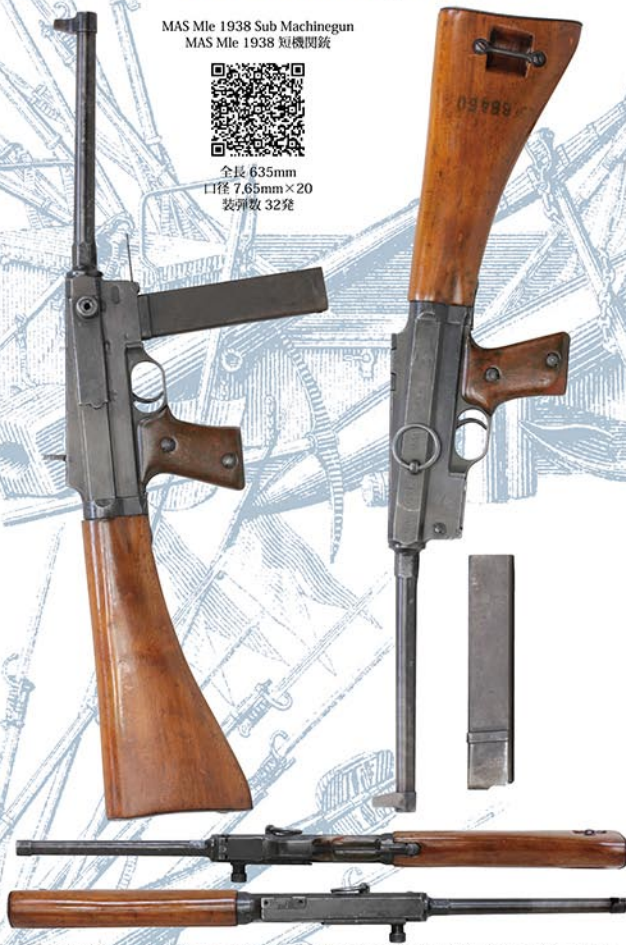


全長 635mm
口径 7.65mm×20
装弾数 32発

ベルチエ小銃は1890年にフランス軍制式となったボルトアクションライフルで、レベール小銃の作動機構を改良し、チューブ式弾倉に代わってマンリッカー方式のクリップによる装填方式が採用されています。当初は騎兵銃モデルのみが別式採用され、1900年代に入ってようやくMle 1902やMle 1907等の歩兵銃モデルが植民地軍向けに採用されました。1916年には装弾数を3発から5発に増やし、クリップ挿入口の真物の侵入を防ぐためにダストカバーを追加した。Mle 1916小銃が採用されました。1915年以前は全てのベルチエ小銃が下方に折れ曲がったボルトハンドルの装填していましたが、1915年以降は歩兵銃のみストレートタイプのハンドルとなりました。また、Mle 1916以降の生産品には木製アッパー・ハンドガードが追加されました。ベルチエ小銃は第二次世界大戦初期までフランス陸軍で使用された他、戦後フランス外人部隊や植民地軍等で使用されました。



装弾数が増えたとともに、銃床下部に弾倉が突出したデザインとなっています。



フランスが独自開発し、1938年にフランス軍制式採用となった短機関銃です。本銃は反動の軽減を狙って、銃身軸に対して機関部が斜め後方に傾斜したデザインとなっています。また、セーフティはトリガーそのものを前方に回転させて機能する他、排気口だけでなくマガジン挿入口にもカバーが設けられているなど、独特の設計となっています。通常分解を工具無しで容易に行えることも当時としては採用例が少ないものでした。本銃は量産開始早々にドイツ軍の侵襲により接収され、MP722(II)の名を与えられてドイツの軍制式装備として生産が続けられました。実際にフランスの兵器として活躍したのはむしろ戦後で、1950年代にMAT Mle 1949短機関銃に置き換えられるまでフランス警察の装備として使用されました。実際の運用では制式当初から反動が少ない反面、威力不足が指摘されましたが、その軽量化からアルジェリアやインドシナでは空挺用火器として使用されました。



ボルトは銃身に対して斜め後方に後退します。リアサイトを折り畳むと本体上面がフラットになるのも特徴です。

FA-MAS F1 Bullpup Assault Rifle

FA-MAS F1
Bullpup Assault Rifle
FA-MAS F1 自動小銃



France

全長 765mm
口径 5.56mm×45
装弾数 25発



FA-MAS自動小銃は、MAS-49/56自動小銃及びMAT49短機関銃の後継としてフランスのサン・ティエンヌ造兵廠で開発され、1978年から部隊への配備が始まったフランス軍を象徴する自動小銃です。小口径高速弾を使用するブルパップ方式の自動小銃で、外装部に樹脂製部品が多用されている他、作動方式には自動小銃には珍しいレバー・ディレード・ブローバック式が採用されています。本銃には折り畳み式の二脚が標準装備される他、ライフルグレナード発射機構も備えており、対人及び対装甲用の小銃弾が発射可能です。FA-MAS-F1ではM193タイプの5.56mm弾に対応しており、専用の25連マガジンを使用しますが、改良型のFA-MAS G2ではSS109タイプの5.56mm NATO弾に対応したほか、M16タイプの30連STANAGマガジンが使用可能となりました。FA-MAS自動小銃はフランス軍の他、UAE、セネガル等の中東・アフリカ諸国やフィリピン（国家警察特殊部隊などでも使用されています）。



マガジン・ハウジング右側面にはシリアルNo.の他、FA-MAS 5.56-F1のモデル名刻印が入っています。

Hotchkiss Universal Sub Machinegun

Hotchkiss Universal
Sub Machinegun
ホッチキスユニバーサル
短機関銃



全長 775mm(435mm)
口径 9mm×19
装弾数 32発



1949年にフランスのホッチキス社が発表したユニークな折り畳み機構を備えた短機関銃です。グリップ・マガジン・ハウジング、ストックが前方に折り畳み可能である他、銃身も後退させて短縮する事が可能です。本銃は各部を完全に折り畳んだ際には全長が435mmと非常にコンパクトになりましたが、折り畳み機構が複雑となり製造コストが高いといった欠点も存在しました。射撃機構はシンプルなブローバック方式で、オーブン・ボルト位置から射撃を行う構造となっており、グリップ上部のセレクター・ボタンを用いてセミフル・オートマチック射撃の切り替えも可能となっていました。コッキング・ハンドルはレシーバーのスロット上に設けられたダスト・カバーに取り付けられており、射撃中も前後に動かない構造となっています。本銃は1952年まで製造され、フランス軍がインドシナで空挺部隊用として使用した他、ベネズエラにも少数が輸出されました。



トリガー・ハウジング左側面にはシリアルNo.の他、Carabine Mitrailleur Hotchkiss/を意味する「CMH」の刻印が入っています。

写真の銃はすべて写像可能な状態です。

Werndl M1867/77 Jäger Rifle

Werndl M1867/77
Jäger Rifle
ヴェルンドル M1867/77
猟兵銃



全長 1,285mm
口径 11mm×58R
装弾数 単発



ヴェルンドルM1867小銃は、前装式のローレンツ小銃を後装式に改修したウェンツェル小銃と同時期にオーストリア軍が制式採用した後装単発式の小銃です。ヴェルンドル小銃のドラム式ブリーチは後部が大きく開くシンプルな構造にも拘らず非常に堅牢であり、腔内によってブリーチが吹き飛ばす恐れもない優れた構造でした。また、ドラム式ブリーチを回転させて開く際には、エキストラクターが非常にシンプルな構造によって運動し、スモーズに排莖する事が可能でした。撃発機構には前装式小銃と同様のバックロックのサイド・ロックシステムが用いられています。M1867/77はM1867の改良モデルで、使用弾薬が11.15mm×42R弾から11mm×58R弾へと変更されたモデルです。M1867系小銃には歩兵銃に加えて銃身長が異なるバリエーションが存在し、猟兵銃は銃身が歩兵銃よりわずかに短く、トリガーガードに指かりが付いたモデルです。



ハンマーは本体右側面に設けられており、ドラム式ブリーチ後部のファイアリングピンを発射する構造となっています。

Wänzl M1862/67 Infantry Rifle

Wänzl M1862/67
Infantry Rifle
ウェンツェル M1862/67
歩兵銃



全長 1,343mm
口径 14mm×33R
装弾数 単発



ウェンツェルの後装システムは、ブリーチ・ブロックが前部のヒンジを軸に上方に開く一種のトラップ・ドア方式となっており、撃発時にハンマーと連動したピンが前進してブリーチ・ブロック後部をロックする構造となっています。他のトラップ・ドア方式との最大の違いは、ブリーチ・ブロックがレシーバー左側面の強力なV字バネのテンションによって閉鎖されている点です。また、装填時にブリーチ・ブロックを前方に跳ね上げて開放する際にも、ブリーチ・ブロックを垂直に持ち上げた状態からV字バネのテンションによって素早く全開/固定出来る利点がありました。ウェンツェルM1862/67歩兵銃は、ローレンツM1862歩兵銃をベースにウェンツェルシステムを組み込んで後装式に改修したモデルです。リア・サイトは800mまで対応した起倒調整式で、スライダーが両側からサイト・トリップを挟み込む特殊な構造で取り付けられています。



ベースとなったローレンツ小銃同様、ロック・プレートは銃床反動衝でスクアールによりサイド・プレートに固定されています。

写真の銃はすべて無装弾状態です。

Steyr AUG Bullpup Assault Rifle

Steyr AUG
Bullpup Assault Rifle
ステアー AUG 自動小銃



全長 805mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発

Steyr AUG A1 Bullpup Assault Carbine

Steyr AUG A1
Bullpup Assault Carbine
ステアー AUG A1 カービン



全長 720mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30/42発

オーストリアのシュタイヤー・マンリッシャー社が開発したブルパップ式の自動小銃で、SIG 58の後継として1977年にSig 77の別名でオーストリア軍が採用しました。AUGには1970年時としては斬新な試みが数多く見られ、レシーバーをはじめ各部にポリマー製部品が多用されている他、最小限のモジュール交換によりカービン、分隊支援火器、短機関銃への切り替えが可能であるなど、早くからシステム・ウェポンを実用化した銃とも言えます。また、トリガーを引く量に応じてセミフル・オートマチック射撃の切り替えを行う他、内部部品を組み替える事で排莖方向を左右変更可能となっているのも特徴です。1978年から生産が開始されたAUGの初期生産型は、フラッシュ・サプレッサーやフォア・グリップ、スコープの形状等がその後の量産モデルとは異なり、無色透明タイプのマガジンが装備されていました。AUG発表当初の写真は全てこのモデルです。



ストック右側面の「STYR DAIMLER PUCH」のメーカー名及びモデル名の「AUG」がモデル印により入っています。

ステアー AUG A1は初期生産型のAUGに改良を加えたモデルで、1982年に登場しました。AUGのボルト・キャリアはハンマーによって作動中落時上方に押し上げられていますが、AUG A1ではボルト・キャリア後方主部にローラーが追加され、レシーバー内面との摩擦による損耗を軽減しています。AUGは用途に合わせて銃身を容易に交換可能で、銃身長が20インチのスタンダード・モデルに対して、短縮型のカービン・モデルでは16インチの銃身が組み合われます。スタンダード・モデルと同様、カービン・モデルのフラッシュ・サプレッサーもNATO規格の22mmライフル・グレナードに対応しており、アダプターを使用する事でグレナードを発射可能となっています。AUG A1にはキヤリング・ハンドルに1.5倍率のスコープが内蔵されたタイプや、他、内蔵スコープの代わりに他の光学照準器を装着可能なマウントを装備するスベッセル・レシーバーと呼ばれるタイプも製造されました。



ストック右側面のメーカー刻印は「STYR DAIMLER PUCH AUSTRIA」となっています。

Swiss Vetterli M1878 Infantry Rifle



Swiss Vetterli M1878
Infantry Rifle
ベテューリ M1878 歩兵銃



全長 1,320mm
口径 10.4mm×38
装弾数 12発



ベテューリ小銃は1869年から1890年まで使用されたスイス軍の制式小銃で、給弾装置はウィンチェスターM1866のような給弾エレベーター及びチューブ・マガジンによって構成されています。ベテューリのボルト構造は厳密なターン・ボルトではなく、ボルト・ハンドルと一体になったボルト・カラーと呼ばれるチューブ型の部品がハンドルと共に回転しますが、ボルト自体は回転しません。発射時にはボルト・カラー後部に設けられた、2つの突起がロッキングラグとして機能し、ボルトの後退を防ぎます。M1878はM1871の改良型で基本構造は同じですが、リア・バンドが廃され、センター/フロント・バンド及びハンドガード部のキー（開）によって銃身を固定する構造となりました。また、ハンドガード後方のチェックリングが省略され、リア・サイトはエレベーション調整が容易になった大型のタンジェント・リア・サイトを採用する等の改良が行われています。



装弾は本体右側面のローディング・ガードから行い、発射時の薬室は本体上面から露出されます。

Swiss M1842/59/67 Milbank-Amsler Conversion Infantry Rifle



Swiss M1842/59/67
Milbank-Amsler
Conversion Infantry Rifle
スイス M1842/59/67
後装式歩兵銃



全長 1,470mm
口径 18mm
装弾数 10発



1842年にスイス陸軍制式となった前装施条式小銃であるM1842歩兵銃のリア・サイトを固定式から起倒可変式に改修したM1842/59歩兵銃に対して、1867年にミルバンク・アムスラー・コンバージョンシステムを用いて後装弾発射のリム・ファイア式への変更を改修を行ったモデルです。ミルバンク・アムスラー・コンバージョンは、同時期の多くの後装式と同様に、ブリーチ・ブロックの前面を軸にして後部から上方に持ち上げる方式となっています。1867年に同システムを用いて後装式に改修されたスイス軍用前装式歩兵小銃は、単にミルバンク・アムスラー後装式小銃と呼ばれる事もありますが、ベースとなった小銃によって外観に違いが見られます。ベースとなった小銃は、当時のスイスでは州（カントン）単位で調達されており、その多くがバギー製でしたが、後装式への改修はスイス国内で行われた。SIG社等スイスのメーカー刻印も入っています。



ハンマーを起倒した状態でブリーチ・ブロック右側面のハンドルを持ち上げる事により薬室を開放します。

写真の銃はすべて無許可複製です。

Schmidt-Rubin IG89 Infantry Rifle



Schmidt-Rubin
IG89 Infantry Rifle

シュミット・ルビン IG89 歩兵銃



全長 1,300mm
口径 7.5mm×53.5
装弾数 12発

Schmidt-Rubin ZfK31/42 Sniper Rifle



Schmidt-Rubin
ZfK31/42 Sniper Rifle

シュミット・ルビン
ZfK31/42 狙撃銃



全長 1,105mm
口径 7.5mm×55.5
装弾数 6発

1889年にベテリ小銃の後継としてスイス軍制式となった、ストレート・ブル式のボルト・アクション・ライフルです。ストレート・ブル機構はオーストリアのマニッカー方式とは異なり、ボルト・ハンドルとボルト本体が独立しており、ボルト・ハンドルを後方に引くとボルト後部のロッキング・スリーブのみが回転して閉鎖を解く独特の構造になっています。本体下部から突出したマガジン内には世界初の箱弾（アルメタル・ジャケット弾）の一つである7.5mm×53.5 GPO弾を12発装填可能です。尚、マガジンは着脱式ですが、装填は主に機関部上部からクリップを使用して行われました。マガジン右側面にはマガジン・カutoff切り替えレバーが設けられており、レバーを下げた状態でマガジンからの給弾が停止する構造となっています。また、レバーを内側に押し込みながらさらに下方に押し下げると、マガジンの取外しが可能となります。



ライフルは箱弾式で、両側に押し込みながらリアサイトの調整を行います。

シュミット・ルビンK31 騎兵銃に折り畳み式のスコープを標準装備した狙撃銃で、1942年にスイス軍に採用されました。ベースとなったK31騎兵銃は、IG89歩兵銃からIG96、IG96/11、IG11を経て開発されたシュミット・ルビン系のボルト・アクション・ライフルで、歩兵銃が廃止されて騎兵銃（偵察銃）のみに統一されました。ZfK31/42狙撃銃のレシーバー左側面には折り畳み式の1.8倍スコープが固定されており、修理時の取り外しは専用の工具で行いました。使用時にはベリスコープ型のスコープ先端を傾斜させて起こし、銃本体に対して左側にオフセットした位置で使用します。スコープ上部には1,000mまでの目盛りが刻まれたタングステン・サイトが取り付けられており、タングステン・サイト上でスライダーを前後させると、視野内の像が上下してエlevationが変化する構造となっています。本銃は改良型のZfK31/43狙撃銃と合わせて僅か2,300挺程が製造されたに留まりました。



(写真上) スコープ使用時 / (写真下) スコープ収納状態

写真のものはすべて所有品ではありません。

SIG SG510-4 Self-loading Rifle

SIG SG510-4
Self-loading Rifle
SIG SG510-4 自動小銃

全長 1,007mm
口径 7.62mm×51
装弾数 20発



Stgw.57 Self-loading Rifle

Stgw.57 Self-loading Rifle
Stgw.57 自動小銃



全長 1,115mm
口径 7.5mm×55.5
装弾数 20/24/30発

スイスのSIGで製造されたStgw.57(SIG SG510-1) 自動小銃の改良モデルで、スタンダードなStgw.57自動小銃に比べて全長が短く、軽量な設計となっています。Stgw.57では折り畳み式であった前後サイトは、フロント・サイトが固定式、リア・サイトがスライド式へと改良されています。また、ストック及びハンド・ガードが木製となっているのも特徴です。バット・ストックは、Stgw.57のストレートに後方へと伸びた形状から、やや下方に角度をついた形状へと変更されています。Stgw.57の使用弾薬はスイス独自の7.5mm×55 GP 11弾でしたが、本銃は7.62mm×51 NATO弾を使用します。SG510-4は、南米のチリ軍に納入する為にイタリアのベレッタ社でも生産されました。また、SIG SG510-4の派生型として、射撃機能をゼム・オートマチックのみとし、ライフル・グレネード発射機能を廃したAMT (American Match Target) と呼ばれるモデルも製造され、少数が米国へと輸出されました。



通常のトリガーに加えて、本体右側面にウィンター・トリガー機能が装備されています。

K31小銃の後継としてスイス軍制式となった、7.5mm×55 GP 11弾を使用する自動小銃です。GP 11弾は、シュミット・ルビン M1911小銃での採用以来使用されてきた高性能な弾薬でしたが、第二次世界大戦後にボルトアクション方式に限界を覚えたスイス軍は、同弾薬を使用するゼム・フル・オートマチック射撃が可能な自動小銃の開発に乗り出しました。1955年にSIGが提出したAM55自動小銃が採用基準を満たし、これに小改良を加えたものが1957年に制式化されてStgw.57となり、90年代のSG550の登場まで40年近く現役の座に君臨し続けました。スチール・プレス部品を多用し、大戦中のドイツで開発されたSig 45(N)自動小銃のローラー・短延方式に着目を得た独自の短延式ブロー・バック方式を採用しています。バレル先端はライフル・グレネード発射機として機能する他、ストックにはバンプアップが内蔵されており、連射時の反動軽減に寄与しています。



レシーバー上面にはシリアルNoに加えてスイスの国章が打刻されています。

写真の図はすべて無断複製禁止です。

B&T MP9-N Sub Machinegun



B&T MP9-N
Sub Machinegun
B&T MP9-N 短機関銃



B&T MP9短機関銃は、元々オーストリアのステアー社が生産していたTMP短機関銃の製造権をスイスのB&T社が取得し、独自に改良を加えたコンパクトな短機関銃です。TMPでは、ストックが取り外し式でしたが、MP9では本体側面に折り畳む事が可能なフォルディング・ストックへと変更されています。また、トリガーにトリガー・セーフティが新たに組み込まれているのも特徴です。MP9の本体上面及び右側面にはピカティニー・レールが装備されており、Aimpoint TLドット・サイトを始めとする各種光学機器を装備する事も可能となっています。また、銃口部には同社が製造する専用のQD（クイック・デタッチャブル）サイレンサーを取り付け事が可能となっています。MP9 NはMP9短機関銃の最新バージョンで、従来モデルでは貫通式のボルトであったセクターがアンビ・タイプのリバー式へと変更され、操作性がより高められているのが特徴です。



セクター・ポジションのあるセクター・レバーに加え、トリガー・セーフティが組み込まれています。

B&T APC556 PDW Assault Rifle



B&T APC556 PDW
Assault Rifle
B&T APC556 PDW 自動小銃
(エイムポイント・サイレンサー、
伸縮式バット付)



APC (Advanced Police Carbine) は、スイスのB&T社が独自に開発した軍・法執行機関向けのシリーズで、短機関銃から自動小銃まで使用弾薬により幾つかのバリエーションが存在します。APC556は5.56mm×45弾を使用する自動小銃モデルで、ガス・ピストン・ショート・ストローク方式により作動します。レシーバー上面やハンドガード側面及び下面にはピカティニー・レールが装備されており、セクター・レバーやボルト・リリースはいずれもアンビ・タイプとなっている他、コッキング・ハンドルについても左・右で交換可能となっています。また、APC556にはハンマー・フォワード・セーフティと呼ばれる安全機能が組み込まれているのも特徴です。フラッシュ・ハイダーには、同社製のQD（クイック・デタッチャブル）サイレンサーを直接装着可能です。尚、ACPシリーズのストックには複数のバリエーションが存在し、用途に応じて交換が可能となっています。



アッパー・レシーバーのモデル名に加え、マガジン・ハウジングにはB&Tのロゴや「SWISS MADE」の文字が入っています。

写真のものはすべて無作為に撮影したものです。

FN SCAR-H Assault Rifle Long Barrel

FN SCAR-H Assault Rifle
Long Barrel
FN SCAR-H 自動小銃
ロング・バレル・モデル



全長 1,067mm(818mm)
口径 7.62mm×51
装弾数 20発

FN SCAR-L CQC Assault Rifle w/ UGL

FN SCAR-L CQC
Assault Rifle w/ UGL
FN SCAR-L 自動小銃
CQCモデル (UGL付)



全長 790mm(540mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



ベルギーのFN社が米国防務省 (USSOCOM) のトライアル向けに開発した自動小銃です。作動方式はショートストロークピストンによるガス圧作動式となっており、大きく分けて5.56mm×45弾を使用するSCAR-L及び7.62mm×51弾仕様のSCAR-Hと呼ばれる2つのモデルが存在します。両者は使用弾薬が異なるものの、多くの部品を共用した設計となっています。全体に人工工学に基づいた設計がなされており、本体右側面に折り畳み可能なストックは全長を伸縮させて変更できる他、チークピースの位置も変更可能です。セレクトアーやマガジンリリースはアンビタイプとなっており、左右いずれからでも操作可能である他、コッキングハンドルも必要に応じて左右で付け替え可能となっています。また、レシーバー上面やハンドガード部分に各種光学機器やグリップ等を装着可能なピカティニーレールが装備されており、現代の小銃に求められる高い汎用性と信頼性を備えています。



レシーバー・レシーバーはアルミニウム合金製、ロー・レシーバーは鋼製となっています。

米国防務省 (USSOCOM) では2008年に5.56mm NATO弾仕様のSCAR-L (MK16 Mod 0) 及び7.62mm NATO弾仕様のSCAR-H (MK17 Mod 0) の最終テストを完了し、2009年4月から部隊配備が開始されました。しかしながら、その後2010年6月にUSSOCOMはMK16の調達をキャンセルし、その後はMK17のみが調達・運用される事となりました。USSOCOMではその後、MK17を5.56mm仕様に改修するコンバージョン・キットを開発し、一部のMK17に改修を施して運用しています。FN SCARには銃身下部にFN40GLもしくはMK13と呼ばれるEGLM (Enhanced Grenade Launching Module) を装着可能し、40mmグレナードを発射する事も可能です。FN40GLのトリガーはダブルアクション式となっており、不発時にも容易に再撃発が可能となっています。また、本体をスイングさせて装填出来る構造となっている為、M203に比べてより全長の長いグレナード弾を装填する事も可能となっています。SCAR-L及びSCAR-Hの銃本体の違いに合わせて、FN40GLにもそれぞれL及びHの2種類のモデルが用意されています。



EGLM本体には「MK13 MOD 0」のモデル名が刻印されています。

FN MINIMI General Purpose Machinegun

FN Minimi
General Purpose Machinegun
FN MINIMI 汎用機関銃

リトラクタブル・ストック、レール・システム、モデル

全長 910mm(775mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 30発、
またはベルト給弾

FN MINIMI 7,62mm General Purpose Machinegun

FN Minimi 7,62mm
General Purpose Machinegun
FN MINIMI 7,62mm
汎用機関銃

全長 1,010mm
口径 7,62mm×51
装弾数 ベルト給弾

Belgium



ベルギーのファブリック・ナショナル (FN) 社が開発した、5.56mm×45 NATO弾を使用する分隊支援火器で、MINIMIの名称はフランス語でミニ機関銃を意味するMINI Mitrailleuseに由来しています。給弾方式がベルト・リンク及びM16タイプのSTANAGマガジンのいずれにも対応しているのが特徴です。

また、本体下部に装着可能なベルト・リンク用の弾薬箱も用意されており、軽量の本体重量も相まって携行しやすい機関銃となっています。米軍では1982年からM249の名称で採用されている他、我が国の自衛隊でも採用され、軽装甲機動車等の車載銃としても使用されています。FN MINIMIにはスタンダード・モデルの他、銃身を短縮した伸縮式のストックを装備したPARAモデルと呼ばれるタイプもラインナップされています。また、ワイド・カバーの上面にピカティニー・レールが装備されたタイプでは各種光学機器の装着も可能となっています。



レシーバー側面にはシリアルNo.の他、FN社のロゴや「MINIMI 5.56」のモデル名が刻印が入っています。

ベルギーのFN社が開発したMINIMI軽機関銃は、FN MAGを元に小口径化を行い、銃本体の軽量化や携行弾数の増大を図り、分隊支援火器としての運用を容易にした画期的な機関銃でした。しかしながら、5.56mm NATO弾では威力不足となる状況も想定されたことから、7.62mm NATO弾を使用するMINIMIを要望する声が高まりました。7.62mm仕様のMINIMIの発展型としては、米陸軍特殊部隊からの要望に基づき2000年代初頭にMK 48 Mod 0と呼ばれるモデルが開発されていましたが、その後MINIMIの7.62mmモデルが正式にFN社のラインナップに加わりました。7.62mmモデルでは大口径化に合わせてリア・サイトが最適化されている他、バット・ストック内に油圧式のリコイル・バッファも追加されています。7.62mmモデルには、ハンドガードにピカティニー・レールを装備したTRと呼ばれるバリエーションが存在する他、2013年には5段階伸縮式ストックの採用や三脚形状の変更など更なる操作性の向上を図ったMK3と呼ばれる改良型も登場しました。



7.62mmモデルではレシーバー左側面のモデル名が「MINIMI 7.62」となっています。

写真のものはすべて無作動機銃です。

Star Modelo Z-70/B Sub Machinegun



Star Modelo Z-70/B
Sub Machinegun
スター モデル Z-70/B 短機関銃



全長 705mm(477mm)
口径 9mm×19
装弾数 20/30発



スペインのスター社で1962年9月に開発されたZ-62短機関銃の改良型で、1971年に発表されました。Z-62短機関銃ではスペイン国内の軍・警察向けとして9mmフルコ弾仕様で製造された他、輸出用として9mm×19弾仕様も製造されていましたが、Z-70/B短機関銃では9mm×19弾仕様のみとなりました。また、Z-62短機関銃ではトリガーの上下を引き分ける事でセミフルオートマチック射撃の切り替えを行いましたが、Z-70/B短機関銃ではトリガーガード上部に一般的なセレクトー・スイッチが装備された他、マガジン・キャッチもプッシュ・ボタン式からレバー式に変更されています。作動はZ-62と同様にシンプルなおープン・ボルトのブローバック方式で、本体左側面に設けられたコッキング・ハンドルは射撃中に前後に動かない構造となっています。Z-70/B短機関銃は、1980年代半ばにスターZ-84短機関銃が登場した後も、スペイン軍の後方部隊や海軍等で使用が続けられました。



マガジン・リコー・スレーはマガジン・ハウジング後方に設けられています。

Star Modelo Z-84 Sub Machinegun



Star Modelo Z-84
Sub Machinegun
スター モデル Z-84 短機関銃



全長 625mm(410mm)
口径 9mm×19
装弾数 25/30発



スペインのスター社でZ-75短機関銃をベースに開発された短機関銃で、水中から取り出してすぐに内部パーツやマガジンから排水せずそのまま使用できる潜水部隊向けのOTB(Over-The-Beach)仕様となっています。コッキング・ハンドルはボルトと直接連動しておらず、コッキング途中に誤ってコッキング・ハンドルを離してもボルトを停止させて最発を防止する「インターセプティング・フロッピー機構」が組み込まれています。更にボルトが慣性で後退しないように固定する「イナーシャ・ロック機構」も組み込まれています。1996年にスター社が倒産したため、Z-84の生産数は1,000挺以下に留まりましたが、スペイン海軍や特殊部隊にまでいった数を使用しました。また、スペイン治安警察隊の一部も装備しました。また、イランの潜水部隊でも現用として使用されています。Z-84短機関銃には銃身長が8.5インチ及び11インチの二種類のモデルが作られました。



セレクトーはトリガー後方のセーフティとは独立しており、レシーバー左側面に設けられています。

写真の銃はすべて無効実験銃です。

Portuguese Steyr Mannlicher M1896 Carbine



Portuguese Steyr Mannlicher
M1896 Carbine
ボルトガル
ステアー・マンリッカー
M1896 騎兵銃



全長 955mm
口径 6.5mm × 53R
装弾数 5 発

Portuguese Steyr M1886 Kropatschek Infantry Rifle



Portuguese Steyr M1886
Kropatschek Infantry Rifle
ボルトガル ステアー M1886
Kropatschek 歩兵銃



全長 1,320mm
口径 8mm × 60R
装弾数 8 発

1896年にポルトガル軍が採用し、オーストリアのステアー社に発注した騎兵銃です。弾倉はマンリッカー式のエンブロッカー・クリップを使用しますが、ボルトはステアー・マンリッカーM1895小銃のようなストレート・ボルト式ではなく、帝政ドイツのGew. 88小銃に近いターン・ボルト式となっています。ボルトガル軍用のM1896小銃は、ルーマニア軍用のステアー・マンリッカーM1893小銃と基本的には同じモデルですが、ポルトガル軍用モデルの乗客上部にはボルトガル国章が入っている他、リア・サイトの目盛りがルーマニア軍用モデルとは異なります。ポルトガル軍では1888年に採用されたステアー・クローバチュックM1888小銃が未だ大量に使用されていた他、1900年から1902年の間にマンリッカー・シェーナウアー小銃の採用を検討していた事から、ステアー・マンリッカーM1896小銃の発注数は、歩兵銃が約1,000挺、騎兵銃が約4,200挺と軍用銃としては少数に留まりました。



乗客上部には当時のポルトガルの国章であるカリス・一世 (King Carlos I, 在位 1889年 - 1906年) の紋章「王冠」とのライナーが入っています。

オーストリアのステアー社で製造され、ポルトガルでM1886歩兵銃として制式採用されたボルト・アクション・ライフルで、Alfred von Kropatschekが開発したチューブ式弾倉が組み込まれています。使用弾薬は当時開発されて間もない8mmの小口径弾で、従来の弾薬と同等の殺傷力を保ちつつも、初速や射程等に優れており、兵士が従来よりも多くの弾薬を携帯する事が可能となりました。ポルトガルでの採用当初、使用弾薬には黒色火薬が使用されていましたが、1896年に無煙火薬を使用する新型弾薬が開発された事から、銃本体の無煙火薬仕様の改修が行われました。本銃は元々耐久性の高い構造であったが、無煙火薬仕様の変更にも薬室や銃身等の改修は必要で、リア・サイトの変更のみで対応可能でした。本銃のクリーニング・ロッドは、チューブ式弾倉に干渉しないよう左側にオフセットされており、機匣部右側面にはマガジン・カットオフ・レバーが装備されています。



機匣部右側面にはモデル名を示す「M. 1886」の刻印の他、当時のポルトガル主であるルイス一世を示す王冠の刻印が入っています。

写真の銃はすべて無動作状態です。

Berdan M1870 (Type II) Infantry Rifle

PPS43 Sub Machinegun



Berdan M1870 (Type II)
Infantry Rifle
ベルダン M1870
歩兵銃 II型
全長 1,350mm
口径 10.75mm×58R
装弾数 単発

米陸軍特校のハイラム・ベルダンによって設計された、単発式のボルト・アクション・ライフルです。1870年にロシア軍が採用し、その後モシナナガンM1891小銃に更新されるまで使用が続けられました。本銃はボルト閉鎖時に折り畳み式のボルト・ハンドルが30度ほど右側に倒れるのみの独特な構造となっています。同じくハイラム・ベルダンが設計したI型(M1868)は、ストライカー内蔵のブリーチが前方に開くトップ・ドア型の後装式小銃で、こちらも1868年にロシア軍に採用されました。II型は当初英国のBSA社が生産しましたが、その後1874年からロシア国内の各造兵廠で大量に製造され、総生産数は300万挺以上と推定されています。1876年の露土戦争ではオスマントルク軍が使用したビーボディ・バルティニ小銃が長射程であったことから、戦後ベルダン小銃にも長距離射撃に対応したリア・サイト・リブが取り付けられました。



ボルト・ハンドルは閉鎖状態でやや傾め上方を向く形状となっています。



PPS43 Sub Machinegun
PPS43 短機関銃
全長 820mm(615mm)
口径 7.62mm×25
装弾数 35発

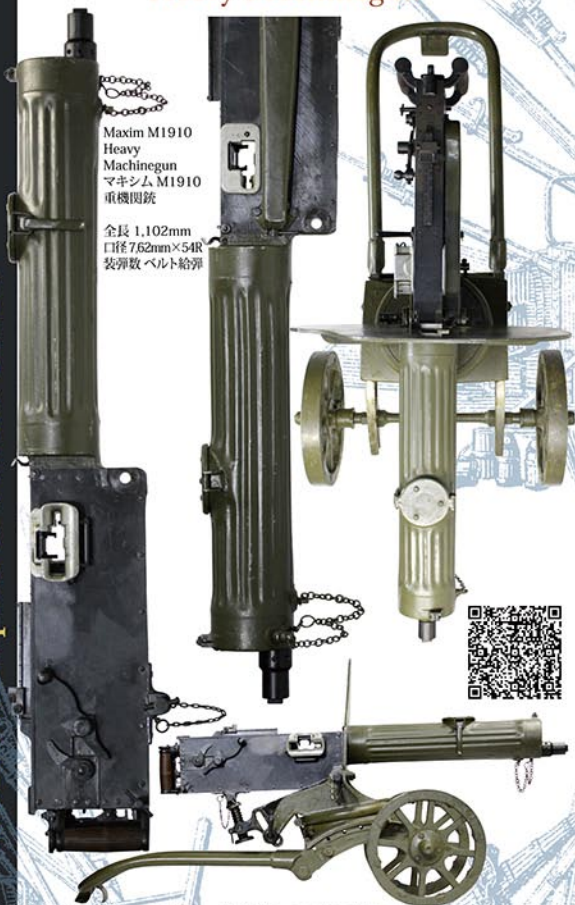
1942年にドイツ軍包囲下にあったレニングラード市において生産が開始されたPPS42短機関銃の改良型です。PPSh41短機関銃を基に軽量化及び省力化を図った設計がなされ、ロシア製の短機関銃としては初めて折り畳み式ストックが採用されました。PPSh41のフォルムを残しながらも、レシーバーには大断面プレス工法を取り入れており、同じ工場での生産を前提として比較的小型のプレス機でも製造出来るよう設計されていました。各部の固定についても、ピンやスロット溶接、鋲を使用する折り切った設計となっています。これにより、PPSh41が1挺あたり10時間以上の製造時間を要したのに対し、PPS43では3時間程度であったと言われています。PPS43ではPPSh41用のドラム・マガジンやパナ・マガジンを使用する事は出来ず、専用のパナ・マガジンを使用する設計となっています。軽量かつ信頼性に富む本銃は高く評価され、ソ連本国の他、戦後は東側諸国でも広く使用されました。



黒色鍍金製のグリップ両面には、菱形の中に大きく「C」の文字が入ったマークが見られます。

写真の銃はすべて写像実銃です。

Maxim M1910 Heavy Machinegun



Maxim M1910
Heavy
Machinegun
マキシム M1910
重機関銃

全長 1,102mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 ベルト給弾

マキシム機関銃をロシアでライセンス生産したM1905の改良型がM1910です。基本構造はM1905と同様ですが、各部の材質等を見直して軽量化が図られています。また、車輪を備えたソコロフ銃架が装備され、一人での移動を可能としました。初期のソコロフ銃架には射撃位置を高くするために折り畳み式の脚が装備されていましたが、この脚は後に省略されました。また、銃架には防弾板も取り付け可能となっていました。軽量化のため本銃では多くの場合取外されて使用されました。M1910は生産時期によっていくつかのバリエーションが存在し、初期型では布製アモバベルトのみ使用可能でしたが、その後金属製アモバベルトも使用可能となりました。また、水冷ジャケットについても各戦争後に改良されたモデルでは冷却水の迅速な補給のためジャケット上部に開閉可能な大型の蓋が追加され、水の代わりには直接雪を入れた事も可能となりました。



レシーバー後部には押金式のトリガーが装備されています。アモバ・グリップにはオイラー・ブラシが内蔵されています。

DS39 Heavy Machinegun



DS39
Heavy Machinegun
DS39 重機関銃

全長 1,170mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 ベルト給弾

ヴァシーリー・デグチャレフによって1930年から開発が始められ、1939年にマキシムM1910/30重機関銃の後継としてソ連軍制式となった口径7.62mmの空冷式中型機関銃です。DS39重機関銃は1939年から1941年にかけて約10,000挺が製造されましたが、1941年のドイツによる侵攻後の実戦使用において、連射射撃時の信頼性に乏しく、作動不良やジャムが頻発するといった、制式前のトライアルでは発見されなかった深刻な欠陥が顕在化したため、短期間で製造が中止される事となりました。当時ドイツ軍の侵攻下であったソ連軍にはDS39の欠陥を改善する余裕がなかったため、DS39重機関銃を製造していた工場では、旧式ながら信頼性の高いマキシムM1910重機関銃の製造への切り替えが行われる事となりました。DS39重機関銃は1941年の継続戦争時にフィンランド軍によって約200挺が南渡され、フィンランド軍兵士達に支給されたと言われていました。



トリガーは左右のスバード・グリップ前方に装備されています。アモバベルトは本体右側から給弾されます。

写真のものはすべて無作動機銃です。

East German MPi-KM Assault Rifle

East German
MPi-KM Assault Rifle
東ドイツ MPi-KM
自動小銃



全長 893mm
口径 7.62mm×39
装弾数 30発

East German MPi-AKS-74N Assault Rifle

East German
MPi-AKS-74N
Assault Rifle
東ドイツ MPi-AKS-74N
自動小銃



全長 939mm(736mm)
口径 5.45mm×39
装弾数 30発

1966年にドイツ民主共和国(東ドイツ)は、従来のAK-47のライセンス生産品である折り出しレシーバーのMPi-KMを経て、より生産性の高いプレス製レシーバーのMPi-KMの生産を開始しました。MPi-KMでは初期生産品を除いてグリップ及びアッパースハンドガードが樹脂製となり、ロアハンドガードのみ樹脂製の問題から当初3ナ材によって製造されていたが、1980年には完全に樹脂製になりました。バットストックについても、量産型では表面に特徴的な凹凸がモールドされた樹脂製のタイプとなっています。銃、ストック内にはクリーニング用のコンパートメントは設けられていません。銃口部には当初MPi-KM自動小銃と同様のマズルブラッキングが装着されていたが、1971年には竹筒型のマズルブレーキが導入されました。リアサイトの最大射程表示はソ連製AKMと異なり、800mまでとなっています。MPi-KMは東ドイツが消滅する1990年まで生産が行われました。



レシーバー側面には、シリアルNoに加えて製造年の下桁が打刻されています。



旧東ドイツで1985年から生産が開始された、小口径の5.45mm×39弾を使用するAK-74自動小銃のライセンス生産モデルで、固定ストックモデルのMPi-AKS-74N及び折り畳み式ストックを装備したMPi-AKS-74Nと呼ばれるモデルが製造されました。本銃には各種光学機器を装着する為のマウントレールがレシーバー左側面に取り付けられており、NSP等の暗視装置の他、ZEK 4×25スコープが装着可能となっていました。マガジンはMPi-KMでは金属製でしたが、MPi-AKS-74Nでは樹脂製となっています。また、リアサイトの最大射程表示もMPi-KMの800mから1,000mに変更されています。MPi-AKS-74NはMPi-KMと同様に、東ドイツが消滅する1990年まで製造が行われ、約25万挺が生産されて東ドイツ国人民軍に配備された他、一部はベルギーへの輸出も行われました。また、折り畳み式ストックを装備したMPi-AKS-74Nは、国人民軍の降下猟兵部隊である第40航空突撃連隊「ヴァーゼンゲルン」等に配備されていました。



レシーバー左側面には、VEBエルンスト・テューレン工場を示す樹門形にK3の刻印が入っています。

写真の写しはすべて無断複製禁止です。

Bulgarian AKS-47 (AKKS) Assault Rifle

Bulgarian
AKS-47 (AKKS)
Assault Rifle
ブルガリア AKS-47
(AKKS) 自動小銃

全長 875mm(637mm)
口径 7.62mm×39
装弾数 30発



Bulgarian RPK-74 Light Machinegun

Bulgarian RPK-74
Light Machinegun
ブルガリア RPK-74 軽機関銃



全長 1,065mm
口径 5.45mm×39
装弾数 30/45発



1946年のブルガリア人民共和国成立後、軍で使用する小火器は当初旧ソ連やポーランドからの輸入に頼っていましたが、その後国産化が図られました。AK-47の生産は、1960年代初頭までは国外から部品を輸入して組み立てる「ノックダウン」方式で行われていましたが、1960年代後半に入ると完全な国内生産へと移行しました。ブルガリアのガザンラク造兵廠で製造されたAKS-47は、基本的にはオリジナルのソ連製と同規格で、初期生産品には木製の手ガード及びグリップが装備されていましたが、その後ポリアミド・プラスチック製の物へと変更されました。また、製造工程の省力化のために、1970年代後半から銃身の固定方法が投げ込みからピンによる固定へと変更されました。ブルガリアではプレス製レシーバーを持つAKMタイプの生産が本格的に行われなかったが、1980年代後半にAK-74タイプの後継機種が登場するまで、閉り出しレシーバーのAK-47の生産が続けられました。



レシーバー左側面にはシリアルNo.に加えてガザンラク造兵廠を示す「重丸」に数字の10が入ったマークが打刻されています。

ブルガリアでライセンス生産されたRPK-74軽機関銃です。RPK-74はRPK軽機関銃をベースにAK-74自動小銃と同じ小口径の5.45mm×39弾を使用出来るように改良したモデルです。マガジンは樹脂製の45連バナナ・マガジンの他、AK-74用の30連バナナ・マガジンも使用可能です。RPK-74の銃口部にはRPKのマズル・リングに代わり、ハードウェア・ジャブのフラッシュ・サプレッサーが装備されています。ブルガリアにおけるRPK-74の製造は1980年代後半頃から始まり、当初は旧ソ連から輸入した部品を使用した「ノックダウン」生産が行われていましたが、その後ブルガリアでの国内生産に移行しました。ブルガリア製のRPK-74は基本的にソ連製の物と同一仕様で、レシーバー左側面に「重丸」の中に数字の10が入ったガザンラク造兵廠の刻印が入っています。また、ハンドガードやバット・ストックは、ロシア製のRPK-74後期型と同様の樹脂製のタイプが装備されています。



レシーバー左側面にはシリアルNo.や造兵廠刻印の他、製造年を示す刻印が入っています。

写真の他はすべて無断複製禁止です。

CZ Scorpion EVO 3 Sub Machinegun

CZ Scorpion EVO 3
Sub Machinegun
CZ スコーピオン
EVO3 短機関銃



全長 675mm(415mm)
口径 9mm×19
装弾数 30発



チェコのCZ社が法執行機関や特殊部隊向けに製造している、9mm×19弾を使用する小型軽量な短機関銃です。モデル名はVz.61スコーピオンに始まるCZ製小型短機関銃の三代目である事に由来しますが、Vz.61シリーズ等とは異なる全くの新設計となっています。本銃の原型はスロバキアで2002年に開発されたLaugoと呼ばれる短機関銃で、その後CZ社が製造権を取得して2009年にスコーピオン EVO3として発表されました。作動機構はクロード・ホルトのブローバック方式で、セミ/フルオートマチック射撃の他に3点バースト射撃も可能となっています。レシーバーを始めとする銃本体にはポリマー素材が多用されており、レシーバー上面やハンドガードには各種アクセサリを取り付けるためのピカティニーレールが装備されています。樹脂製の折り畳み式ストックは長さの調整が可能で、連射時には銃本体から容易に取り外す事が可能です。



ストックは3段階で長さの調整が可能で、完全に縮めた状態で銃本体の右側面に折り畳み可能です。

CZ 805 BREN A1 Assault Rifle



CZ 805 BREN A1
Assault Rifle
CZ 805 BREN A1
自動小銃



全長 910mm
(670mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 30発

Vz.58の後継としてチェコのCZ社で開発された自動小銃で、2005年に開発が始まり2010年にチェコ軍に制式採用されました。Vz.58の後継としては元々1990年代初頭にCZ2000が開発されていたが、当時の情勢から後継小銃選定の話が棚上げされ、その後本銃が後継自動小銃の座を受け継ぐことになりました。CZ 805 BRENには銃身長の異なるバリエーションが用意されており、銃身長360mmのスタンダードモデルがCZ 805 BREN A1、277mmのカービンモデルがCZ 805 BREN A2と呼ばれます。セレクトーはアンビタイプとなっており、セミ/フルオートマチックの他、2点バースト射撃が可能です。また、コッキング・ハンドルも左右を任意に交換可能です。弾倉は透明な樹脂製となっており、マガジン・ハウジングの交換によってSTNAGマガジンやHK G36用マガジンも使用可能となっています。ストックは本体側面に折り畳む事が可能となっており、伸縮式で長さを調節可能なタイプと固定式のタイプが存在します。



レシーバー左側面には「CZ 805 BREN」のモデル名及びCZ社のロゴが打刻されています。

写真の物はすべて無作動機体です。

Polish RPD Light Machinegun

Polish RPD Light Machinegun
ポーランド RPD 軽機関銃



全長 1,036mm
口径 7.62mm×39
装弾数 ベルト給弾

Polish SG43 Heavy Machinegun

Polish SG43 Heavy
Machinegun
ポーランド SG43
重機関銃



全長 1,150mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 ベルト給弾

DP軽機関銃を開発したヴァシーリー・デグチャレフが設計したベルト給弾式の軽機関銃で、AK-47と
同じ7.62mm×39弾を使用します。作動方式はロング・ストローク・ピストンのガス圧利用方式で、閉
鎖機構はDPと同様のロッキング・フラップを用いた

方式となっています。高、本体下部にはアモニウム
を収納するドラム型弾薬箱を装着する事が可能と
なっています。RPDは歩兵が装備するAKと弾薬を
共用する事が困難であった事から、旧ワルシャ
ワ条約機構加盟国では1960年代にAKの派生型で
マガジンを共用可能なRPK軽機関銃にその座を譲
りましたが、ベルト給弾式でありながら軽便で信頼
性が高い為、現在でもアフリカやアジア諸国で使
用されています。RPD軽機関銃は、戦後ポーランド
でもRKMDの制式名でライセンス生産が行われ
ました。ポーランド製RPDは、箱型の中に数字の
11番が入ったポーランドの造兵廠刻印が入って
おり、高品質な作りが特徴です。



フィーダー・カバー上面にはシリアルNoや製造年の他、箱
型の中に数字の11が入ったポーランドの造兵廠刻印
が入っています。

SG-43は7.62mm×54R弾を使用する重機関銃で、マキシムM1910重機関銃の後継として第二次世界大戦中
に旧ソ連で開発されました。通常は防弾板と車輪が装備され
たM1943銃架に搭載して使用します。作動方式はガス圧利
用方式で、閉鎖機構はティルティン・ボルト方式となってい
ます。銃身は肉厚の空冷式で、銃身交換を容易にするためキ
ャリング・ハンドルが取り付けられています。また、レシーバー後
部にはスベード・グリップが取り付けられており、下側のグ
リップはコッキング・ハンドルとして機能します。SG-43は戦後東
諸国でライセンス生産が行われ、一部の国ではソ連から部品
が供給されてノックダウン生産も行われました。ポーランドに
おけるSG-43の製造は1952年から1956年にかけて行われ
、「7.62mm CKM wz 43」の制式名で採用されました。ポー
ランド製のSG-43には、フィーダー・カバー上面にポーランドの造兵
廠刻印やモデル名が打刻された個体が多く見られます。



トリガーは押金式となっています。スベード・グリップには
オイル・ブラシが内蔵されています。

写真の物はすべて無許可複製です。

FPK Sniper Rifle

Romanian RPK Light Machinegun

FPK Sniper Rifle
FPK 狙撃銃



全長 1,158mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 10発



1970年代初頭にルーマニアで開発された半自動式の狙撃銃で、PSLとも呼ばれます。開発コンセプトはソ連のドラグノフSVD狙撃銃と同様ですが、構造的にはAK系自動小銃を発展させたものとなっています。作動方式はガス圧利用方式で、ドラグノフがショートストローク・ピストン式であるのに対し、FPKではAK系自動小銃と同じロングストローク・ピストン式となっています。レシーバーはスチール・プレス製で、RPK軽機関銃と同様のドラゴニオン・ブロック周辺部の張り出しが設けられています。本体左側面にはマウントレールが装備されており、ソ連のPSO-1スコープとはほぼ同スペースのルーマニア製LPS 4×6/TIP2スコープが装着可能となっています。また、バックアップ用のアイアン・サイトも装備されており、スコープの故障時等にはこちらを用いて射撃を行う事も可能です。銃身先端下部には着剣ラグが設けられており、銃剣の装着も可能となっています。



レシーバー下部にはシリアルNoや製造年の他、ルーマニアのCugir造兵廠を示す刻印が入っています。

Romanian RPK
Light Machinegun
ルーマニア RPK 軽機関銃



全長 1,035mm
口径 7.62mm×39
装弾数 30/40/75発



旧ソ連でAKM自動小銃をベースに開発された分隊支援火器であるRPK軽機関銃をルーマニアでライセンス生産したモデルです。RPKは連続射撃に対応するためAKMに比べてレシーバーが強化されており、肉厚の長銃身が装備されている他、伏射時に左手を添えられるよう独特な形状となったバット・ストック及び二脚が装備されています。また、従来のAK/AKM用30連バナナ・マガジンに加えて、同時に開発された40連バナナ・マガジン及び75連ドラム・マガジンが使用可能となっています。RPKはルーマニアでも製造が行われ、PM md. 64の制式名でルーマニア軍が使用しました。ルーマニアで製造されたRPKは基本的にはソ連製と同一仕様ですが、弾倉が金属製となっている他、ルーマニア独自の伸縮可能な二脚を装備する個体も存在します。また、セクター表示は「S（安全位置）」・「FA（連射）」・「FF（半射）」のアルファベット表記となっています。



蝶ネジを緩める事により二脚を伸縮させて長さを調整可能です。

写真の銃はすべて無作動実銃です。

Danuvia 43M Sub Machinegun

Danuvia 43M
Sub Machinegun
ダヌビア 43M 短機関銃



全長 947mm(758mm)
口径 9mm×25
装弾数 40発



ハンガリー ダヌビア社のパール・キライ技師が設計した39M短機関銃の改良型です。1930年代後半にキライ技師は9mm×19パラベラム弾より遙かに強力な9mm×25mmモーゼル弾を使用する短機関銃を開発し、1939年12月に39M短機関銃としてハンガリー軍制式となりました。39M短機関銃の発射速度は毎分750発と比較的高いものでしたが、東洋性は良好でハンガリー軍の兵士からも高い評価を受けました。装弾数40発のマガジンは前方に折り畳みが可能で、コンバトに携行が可能でした。また、マガジンを折り畳んだ際にはマガジンハウジング後部のプレートがマガジンハウジングをカバーし、異物の侵入を防ぎます。更に当時の短機関銃としては珍しく、レバー遅延ブローバック方式を採用しているのも特徴です。1943年にはストックを下方から回転させる折り畳み式に変更し各部を改良した43M短機関銃が採用され、東部戦線ではドイツ軍もMP43(a)の名称で使用しました。



銃床左側面には大きく「S」の文字が打刻されています。

Danuvia 53M/K1 Sub Machinegun

Danuvia 53M/K1
Sub Machinegun
ダヌビア 53M/K1
短機関銃



全長 830mm(545mm)
口径 7.62mm×25
装弾数 30発



戦後社会主義陣営となったハンガリーで1950年代初頭に独自開発された短機関銃です。Jozsef Kucher技師により設計され、開発名のイニシャルからK1短機関銃とも呼ばれます。使用弾薬は7.62mm×25弾で、作動方式はオープン・ボルトのブローバック方式となっています。セクター・レバーはトリガーハウジング左側面に設けられており、コッキング・ハンドルには前進もしくは後退位置でボルトをロックする安全装置が組み込まれています。レシーバーなど本体の大部分にプレス製部品が取り入れられており、銃身にはバレル・ジャケットが装填されている他、銃口部にはマズルブレーキが設けられています。銃、ストックは下方に回転させて折り畳む事が可能です。53M短機関銃は1953年に制式となりましたが、当時ハンガリー軍では既にPPSh41短機関銃のライセンス生産品が配備されていたため、警察組織や国境警備隊、準軍事組織等に少数が配備されたに留まりました。



本体左側面にはセクター・レバーが設けられており、E (Egyes-単身)とS(Sorozat-連射)の切り替えが可能です。

写真はすべて所有物実物です。

Zastava M70B Assault Rifle

Zastava M70B
Assault Rifle
ツァスタバ M70B
自動小銃



全長 900mm
口径 7.62mm×39
装弾数 30発



Zastava M76 Sniper Rifle

Zastava M76 Sniper Rifle
ツァスタバ M76 狙撃銃



全長 1,135mm
口径 7.92mm×57
装弾数 10発



1959年以降、ツァスタバではAKタイプの自動小銃の開発を開始し、削り出しレシーバーを持つM64と呼ばれる初期の試作モデルを市のトライアルに提出しました。M64にはライフル・グレナードの発射機能が装備されていた他、ボルトのホールド・オープン機能が内蔵されており、ハンド・ガードやレシーバーの形状も通常のAKとは異なっていました。M64は歩兵用の通常装束として採用される事はありませんでしたが、その後1970年に入るとようやくユーゴスラビア軍向けにAKタイプの自動小銃の生産が開始され、M64の改良モデルがM70として制式となりました。M70BはM70の更なる改良モデルで、M70では本体に組み込まれていたホールド・オープン機能がマガジン・フローワーへへと移された他、銃身の固定方法がねじ込み式からピンによる固定へと変更されています。M70Bにはバリエーションとして折り畳みストックモデルのM70ABも製造されました。



レシーバー左側面には「ZASTAVA KRAGUJEVAC YUGOSLAVIA」のメーカー名及びロゴが打刻されています。

旧ユーゴスラビアで1970年代半ばに開発された半自動式の狙撃銃です。設計思想は旧ソ連のドラグノフ SVD 狙撃銃と同じですが、構造的にはAK-47自動小銃をベースに狙撃銃へと発展させた設計となっています。その為、作動方式はSVDのようなショート・ストローク・ピストン方式ではなく、一般的なAK系自動小銃と同様のロング・ストローク・ピストン方式となっています。また、使用弾薬についてもドラグノフSVDが使用する7.62mm×54R弾ではなく、Kar-98K小銃のユー・エー改良型であるM48小銃やMG42機関銃を国産化したM53機関銃と同じ7.92mm×57mm-セーラー弾となっています。既、本銃用として高精度のM75弾が支給されました。本銃のレシーバーは削り出しで製造されており、ストックはSVDのようなグリップ一体型ではなく、グリップとストックが独立した形状となっているのが特徴です。狙撃用のスコープについては、ユーゴスラビアで開発された4倍率のZRAK ON-M76スコープが標準で搭載されました。



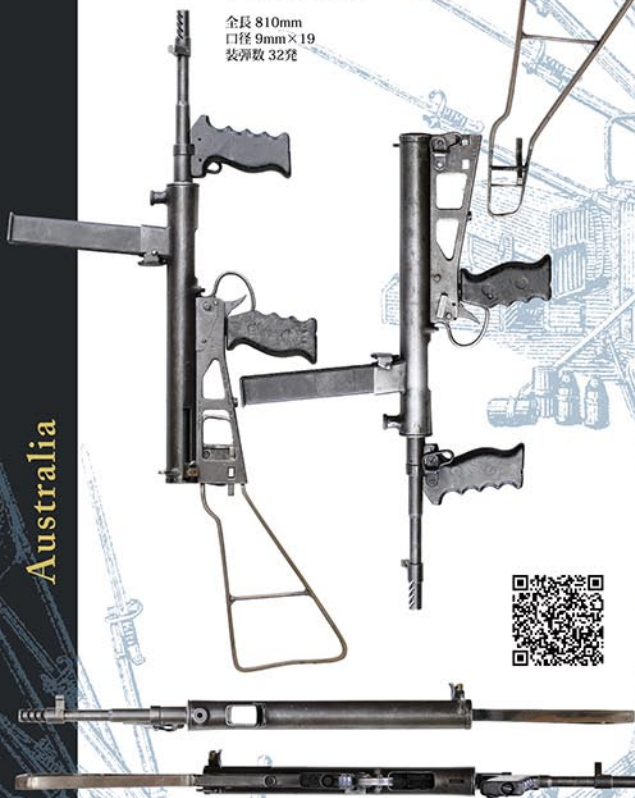
レシーバー左側面にはシリアルNo.や製造年の他、「M.76」のモデル名が打刻されています。

写真の銃はすべて写真撮影です。

Owen Machine Carbine MkI

Owen Machine Carbine MkI
オーウェン MkI 短機関銃

全長 810mm
口径 9mm×19
装弾数 32発



1939年にオーストラリアのEvelyn Owenが開発し、1942年から製造された短機関銃で、1942年から1944年にかけて約45,000挺が製造されました。オーウェン短機関銃は製造時期に応じていくつかのバリエーションが存在し、1942年に製造された初期型モデルはMkI/42と呼ばれ、銃身基部に冷却フィンが設けられている他、ストックは金属板を加工した着脱可能なメタル・フレーム構造となっています。MkI/43は1943年初頭に製造されたタイプで、MkI/42と同様に銃身基部には冷却フィンが設けられていたが、1943年後半に入ると、この冷却フィンが省略されたタイプの製造が始まりました。また、MkI/43からは木製バット・ストックが装備された品も製造されるようになりました。オーウェン短機関銃は、オーストラリア陸軍では短機関銃に置き換えられる1960年代中頃まで使用され、朝鮮戦争やバトナム戦争時でも主にオーストラリア軍の斥候部隊で使用されました。



ロー・フレーム(右側面)には「OWEN 9MM. MKI-43」のモデル名刻印やバント刻印が入っています。

SMLE No.1 MKIII* Rifle mfd. by SAF Lithgow

SMLE No.1 MKIII* Rifle
mfd. by SAF Lithgow
SMLE No.1 MKIII* 小銃
(Lithgow造兵廠製)



全長 1,132mm
口径 .303in.
装弾数 10発



SMLE No.1 MKIII小銃は、SMLE No.1 MKIを改良して1907年に英軍制式となったボルト・アクション・ライフルで、第一次、第二次大戦を通じて使用されました。MKIIIではリア・サイトが簡略化された他、MKIではボルト・ヘッドに取り付けられていたクリップ・チャージャー機能が本体側に移されました。また、ハンドガードやマガジンのデザインも変更され、薬室形状も高初速の実証済であるMKIV弾を使用出来るよう改良が加えられています。MKIIIはMKIIの製造コストを下げるために一部を改良したモデルで、第一次世界大戦中の1915年に登場しました。MKIIに装備されていたマガジン・カットオフ機能が廃止された他、長距離射撃用のボレー・サイトやア・サイトのウインデージ調整機能も省略されています。また、コッキング・ピースの形状も円形から滑り止め溝の付いた板状に変更されました。MKIII及びMKIII*はオーストラリアのリズゴード兵廠でも製造され、1950年代まで生産が続けられました。



ストック・カラー(右側面)にはモデル名や製造年の他、リズゴード兵廠製を示す刻印が入っています。

写真の他はすべて無断複製禁止です。

Tavor TAR 21 Assault Rifle

Tavor TAR 21
Assault Rifle
タボル TAR 21
自動小銃



全長 725mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



Galil ARM Assault Rifle

Galil ARM Assault Rifle
ガリル ARM 自動小銃



全長 975mm(743mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 35/50発



イスラエル軍で使用されていたM16A1やガリル自動小銃の後継として、1990年代後半にIMI社で開発されたブルバップ式の自動小銃です。戦場の過酷な環境下における信頼性や整備性を高めた設計が行われており、作動方式はAK-47やガリル自動小銃と同様のロングストローク・ピストンによるガス圧利用式となっています。左利きの射手にも配慮されており、セレクトアー・レバーはアンビタイプとなっている他、内部部品を組む事により構装方向を左右で変更可能です。また、ブルバップ方式の弱点でもある全長の短縮に伴い照門と照星の間隔が短くなる問題をカバーする、専用のITI社製MARSサイトや、より安価なメプロロイト社製Mepro21サイトが標準装備されます。銃、マガジンはM16系と共通のSTANAGタイプが使用可能です。本銃は2005年以降IMI社の火器部門が独立したIWI社によって生産されており、イスラエル以外に中国・法領行機向けとして各国に輸出されています。



ストロークと側面にはモデル名やシリアルNo.の他、IMIのロゴが入っています。

イスラエル国防軍で使用されていたFN FALを更新すべく、フィンランドで開発されたAK-47の発展型であるバルメットRk.62をベースに、第三次中東戦争の実戦経験に基づいた独自改良を行い、国産化した自動小銃です。ガリル自動小銃は1973年に制式となり、1970年代半ば頃から配備が始まりました。しかしながら、ほぼ同時期に米国からM16A1が安価に輸入可能となった為、イスラエル軍内では一般的にはM16A1が使用され、ガリル自動小銃は主に機甲部隊や砲兵に配備された他、輸出用等として製造されました。ガリルARMはハンドガード下部に折り畳み可能な一握や、遠射射撃時の冷却効果を狙った大型のハンドガードを装備したモデルとして利用可能である等、独自の機能も備えています。ガリルARMにはハンドガードの材質や着脱装置の有無によって複数のバリエーションが存在します。



レシーバー左側面にはペライディ語によるモデル名及び口径表示の他、イスラエル国防軍のロゴが入っています。

写真のものはすべて無作為に撮影されています。

Micro UZI Sub Machinegun

Israeli Mini UZI
Sub Machinegun
マイクロ UZI 短機関銃



全長 460mm(250mm)
口径 9mm×19
装弾数 20/25/32発

Mini UZI Sub Machinegun

Israeli Mini UZI
Sub Machinegun
ミニ UZI 短機関銃



全長 600mm(360mm)
口径 9mm×19
装弾数 20/25/32発

UZI短機関銃を小型化したミニUZI短機関銃に対して、特殊部隊などの近接戦闘向けとしてさらなる小型化を目指して開発された短機関銃です。その極めてコンパクトなサイズのため、フル・オートマチック射撃時の発射速度はさらに上昇し、約1,200発/分に達しました。そのため連射射撃時のコントロールは非常に困難となっています。L字型の折り畳みストックはミニUZIのストックをさらに小型化したようなデザインとなっており、ミニUZIと同様に折り畳んだ際にバット・ブレード部分がフォア・グリップの役目を果たします。後型型のマイクロUZIではトリガー・ガードに指掛けが追加された形状となっているのが特徴です。また、コッキング・ハンドルを本体左側面に移設し、レシーバー・上面にピカティニーレールを追加して各種光学機器を装着可能としたタイプも製造されています。



レシーバー・側面後部にはシリアルNo.の他に「MICRO UZI 9mm PARA IMI」の刻印が入っています。

UZI短機関銃をイスラエル警察からの要請により小型化し、1980年代前半に開発されたモデルです。基本構造はフルサイズのUZIとはほぼ同様ですが、レシーバーの短縮化に伴ってボルトの後退量が減少し、メイン・スプリングが強化されています。そのため、フル・オートマチック射撃時の発射速度がスタンダード・モデルの約600発/分に対して約950発/分にまで上昇しました。連射時のコントロールを容易にするため、銃身先端にはガス・ポートとして機能する2本のスリットが追加されています。また、折り畳み式ストックのデザインはフルサイズのUZIとは異なり、サイド・フォールディング式に変更されています。ストックは折り畳んだ際にバット・ブレード部分がフォア・グリップとして機能します。シンプルなオープン・ボルト方式で動作するモデルの他、作動方式をクロス・ボルト方式に変更して命中精度を高めたモデルも製造されています。



本体上面のストック・カバー・プレートには、改造を禁止し使用時のマニュアル確認を促す警告文が入っています。

Rasheed Self-loading Carbine



Rasheed
Self-loading Carbine
ラシード自動小銃



全長 1,035mm
口径 7.62mm×39
装弾数 10発

Akaba Sub Machinegun



Akaba Sub Machinegun
アカバ短機関銃

全長 750mm(510mm)
口径 9mm×19
装弾数 36発



リョングマンm/42自動小銃に改良を加えてエジプト軍用として開発されたハキム自動小銃から派生した半自動カービンです。ラシード自動小銃の設計は、リョングマンm/42やハキム自動小銃と同じくスウェーデン人銃器設計者Erik Ekstrandによって行われました。外観が旧ソ連のSKSカービンに近い物となり、SKSと同様の折り畳み式銃剣が装備されていますが、作動方式はリョングマンm/42等と同様のダイレクト・インピジメント式でガス圧利用方式となっています。ハキム自動小銃で不評だったコッキング・ハンドルは一般的な形状となり、本体右側面へと移されました。コッキング・ハンドルはボルト・チャリアとは独立しており、射撃中も前後に動かない構造となっています。マガジンは着脱式ですが、レシーバー上部からクリップを使用して装弾を行う事も可能です。ラシード自動小銃は1960年代に僅か8,000挺程度が生産されたに留まりました。



マガジンリリースレバーは折り込み式で、レバーを後方に倒らせてから前方に押し込む事でマガジンを取外します。

エジプトでカールグスタフm/45短機関銃を国産化したボートサイド短機関銃の構造を更に簡略化したモデルです。バレル・ジャケットが廃された他、ストックが米国のM3短機関銃に類似した伸縮式に変更されています。フロント・サイドがサイド・ガードの付かないシングルなボスト・タイプに変更された他、リア・サイドもフリップ式機能が簡略化されて後方へと移されています。バレル・ジャケットが省略された事に伴い、ボートサイドではバレル・ジャケット側面に取り付けられていたフロント・スリング・スイベルがレシーバー前方左側面に移されました。また、ボートサイドではレシーバー後部左側面に設けられていたリア・スリング・スイベルについても、アカバではグリップ下部にスリング取り付け部が設けられています。尚、オリジナルのカールグスタフm/45以来の特徴でもある着脱式のマガジン・ハウジングについてはそのまま残されています。



リア・レシーバー右側面には「AKABA 9mm MADE IN EGYPT」のモデル名刻印が入っています。

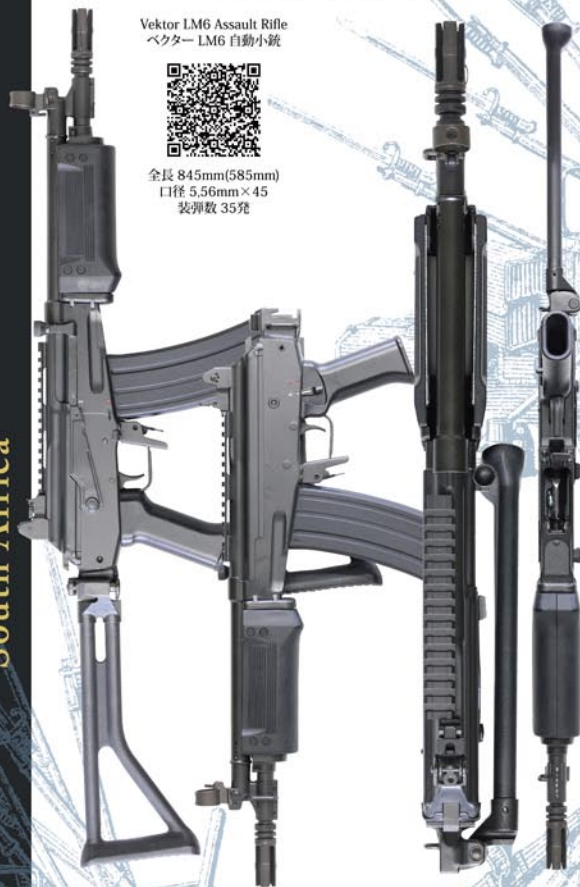
写真の銃はすべて写真用模型銃です。

Vektor LM6 Assault Rifle

Vektor LM6 Assault Rifle
ベクター LM6 自動小銃



全長 845mm(585mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 35発



Vektor CR21 Bullpup Assault Rifle

Vektor CR21
Bullpup Assault Rifle
ベクター CR21 自動小銃



全長 770mm
口径 5.56mm×45
装弾数 20/35発



ベクターRシリーズ及びその民間向けモデルであるLMシリーズは、イスラエルで開発されたガリル自動小銃を南アフリカのデネル・ランド・システムズ(旧ILIW)社でライセンス生産した自動小銃です。基本的にはガリルの基本構造やデザインを受け継いでいますが、南アフリカにおける体格差に合わせてフォールディング・ストックがオリジナルのガリルよりも延長されています。セレクター・ファイアのベクターRシリーズに対して、LMシリーズはセミ・オートマチック射撃に限定した民間市場及び法執行機関向けモデルで、全長の異なるLM4、LM5、LM6といったバリエーションが存在します。LM6は車両格乗員の自衛用として開発されたコンパクト・モデルであるR6をベースとしたモデルで、ストックを折り込む事により全長が585mmとなり、コンパクトに進行可能です。本銃にはマウント・ベースがレシーバー・カバー上面に標準装備されたモデルも製造されました。



シリアルNoは銃身下部に打刻されています。

南アフリカ軍が使用するR4やR5自動小銃の後継として、デネル社の小火器部門であるベクターで開発され、1997年に発表されたブルパップ式の自動小銃です。内部構造はR4自動小銃の機構を改良したもので、AK系自動小銃の作動方式の発展型となっています。銃本体は衝撃吸収によって大部分が覆われており、銃口1前部やフラッシュ・ハイダーを除いて金属部が外部に露出しないデザインとなっています。セレクター・レバーは本体後方に設けられており、本体の前面から操作可能なアンビタイプとなっています。また、セーフティはセレクターと独立しており、トリガー前方に設けられています。本体上部には等倍のリフレックス・サイトが標準装備されていますが、取り外して他のオプションの光学機器への付け替えも可能です。また、銃身下部には専用の40mmグレナード・ランチャーを取り付ける事も可能となっています。



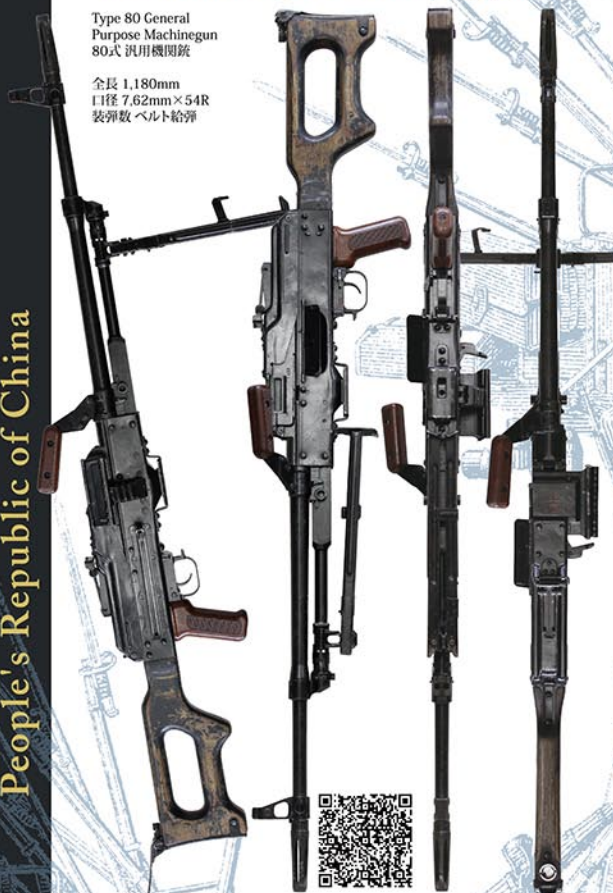
樹脂製のレシーバー・カバーを取り外すと、ベクターRシリーズから流用された機関部が見れます。

写真の面はすべて写真撮影ものです。

Type 80 General Purpose Machinegun

Type 80 General
Purpose Machinegun
80式汎用機関銃

全長 1,180mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 ベルト給弾



ノリコ (中国北方工業公司) がコピー生産したPKM汎用機関銃です。PKM機関銃は、AKシリーズで有名なミハイル・カラシニコフが設計した汎用機関銃で、7.62mm×54R弾を使用するベルト給弾式機関銃でありながら軽量化の設計となっており、その高い汎用性から現在まで改良を続けられながら各国で使用されています。PKMの改良型であるPKMは、プレス加工を多用する事によりPKMに比べて約2.5kg軽量化されている他、銃身表面のフルートが省略されるなど各部に改良が施されています。80式汎用機関銃の基本構造はソ連製オリジナルのPKMと同様で、レシーバー・カバー上面には、「M80」のモデル名の他、三角形の中に「CA」や「CE」等の文字が入った刻印が見られます。輸向けとして製造された為、セーフティ表示は英語表記となっています。本銃は少数が同国軍によって使用されている以外は主に輸出用として生産されており、バングラデシュやスリランカ等で採用されています。



レシーバー・カバー上面にシリアルNo.及びモデル名刻印があります。

Chinese Type 57 Heavy Machinegun

Chinese Type 57
Heavy Machinegun
中国五七式
重機関銃



全長 1,102mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 ベルト給弾



日ソ連で第二次世界大戦中に制式となったSG-43重機関銃を改良、軽量化したモデルであるSGM重機関銃を中国がライセンス生産した物です。SGMでは銃身の軽量化及び冷却性能向上を目的として銃身表面にバレル・フルートが追加された他、給弾孔や爆発口に防弾用のカバーが装着されました。また、SG-43ではレシーバー後方下部に設けられていたコッキング・ハンドルはレシーバー右側面へと変更されています。射撃結果として使用可能な車輪付きマウントについても改良が行われ、限定的な防弾力しか持たなかった防弾板は軽量化のため省略されました。SG-43及びSGMは中国でもライセンス生産が行われ、SG-43に相当するモデルが五三式、SGMに相当するモデルが五七式重機関銃と呼ばれました。五七式重機関銃のフィード・カバー上面には中国の造兵廠のマークに加えて「五七式」のモデル名刻印が入っており、刻印以外はオリジナルのソ連製SGMと同様の作りになっています。



レシーバー右側面にはコッキング・ハンドルが設けられています。

写真はすべて無断複製禁止です。

Daewoo K2 Assault Rifle



Daewoo K2 Assault Rifle
大宇 K2 自動小銃

全長 980mm(730mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 30発

Daewoo USAS-12 Automatic Shotgun

Daewoo USAS-12
Automatic Shotgun
大宇 USAS-12
ショットガン



全長 985mm
口径 12GA
装弾数 10/20発

韓国の大宇が開発し、M16A1の後継として韓国軍に採用された自動小銃です。ロー・ブレイムの各インターフェースの配置等にはM16の影響も見られますが、作動方式はM16系のカス・インヒンジメント方式とは異なり、ロング・ストローク・ピストンのガス圧利用式となっています。アップパー及びロー・ブレイムはM16と同様のアルミニウム系合金製となっており、M16系のSTANAGマガジンがそのまま適用できます。また、M16では機関部後方に飛び出していたリコイル・スプリングを銃身と並行に配置する事により、サイド・フォールディング・ストックを装備する事が可能となりました。コッキング・ハンドルはボルト・キャリアに直接取り付けられています。射撃機能はセミ・オートマチック射撃に加えて、3点バースト射撃も可能となっています。本銃は韓国以外の国でも採用例がある他、セミ・オートマチック射撃に限定した民間モデルも製造されています。

대한민국
5.56MM K2
K000809

マガジン・ハウジング右側面にはシリアルNo.や「5.56MM K2」のモデル名、他に、ハンゲルで大韓民国に入っています。

韓国の大宇が製造するガス圧利用のショットガンで、1980年代に米国のマックスウェル・アッチソンが設計したAA-12ショットガンの原理を基に、ギルバート・エックイップメント社のジョイント・レバー」によってフル・オートマチック射撃が可能なショットガンとして開発されました。しかしながら、同社はこのショットガンを自社製造する能力を持たなかった為、韓国の大宇に製造を委託し、1990年代初頭に量産が開始されました。USAS-12は1990年代半ばまでに3万挺以上が製造されてアジア圏の幾つかの国の軍や治安部隊に販売された他、現在も大宇によって軍・法執行機関向けに製造が行われています。同、ギルバート社はUSAS-12のセミ・オートマチック・モデルをスポーツ用散弾銃として米国に輸出する事を試みましたが、このセミ・オートマチック・モデルはスポーツ銃として認可されなかった。米国における民間向けの販売は大きく制限される事となりました。

USAS-12
12GA. 2 3/4 INCH

USAS-12
12GA. 2 3/4 INCH

MADE IN KOREA BY
DAEWOO PRECISION IND.

MADE IN KOREA BY DAEWOO PRECISION IND.

写真のものはすべて無作動状態です。

SR88A Assault Rifle

SR88A Assault Rifle
SR88A 自動小銃



全長 960mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



SAR80の後継として1988年にシンガポール軍に制式採用された自動小銃です。基本的な設計は前身のSAR80に似ていますが、AR18の影響を強く受け継いだSAR80のショート・ストローク・ピストンは、SR88ではロング・ストローク・ピストンに変更されています。また、SAR80ではプレス製であったアッパー及びロー・レシーバーについても、ロー・レシーバーが鍛造アルミ製になり、新たに折り込み式のキャリング・ハンドルが装備されました。SR88A自動小銃は、SR88のハンドガードやストック等に改良を加えたモデルで、1990年から2000年にかけて製造されました。ガス・シンリンター前方にはガス・カットオフとしても機能するガス・レギュレーターが設けられており、銃口部のフラッシュ・ハイダーにライフルグレナードを装着して発射可能となっています。SR88Aには別身長を具備し、伸縮式のストックを装備したカービン・モデルも製造されました。



視窗側の射撃口カバーはボルトが後退すると自動で開きます。後装填口側にはケース・デフレクターが設けられています。

CIS Ultimax 100 MK3 Light Machinegun

CIS Ultimax 100
MK3
Light Machinegun
CIS Ultimax 100
MK3
軽機関銃



全長 1,024mm
口径 5.56mm×45
装弾数
20/30/60/100発



シンガポールのCIS (現STキネティクス) 社が設計・製造している、5.56mm NATO弾を使用する分隊支援火器で、設計にはスタームルガーMini14やM16自動小銃の開発に関わった米国の銃器設計者ジェームズ・サリバンも参加しています。作動方式は一般的なショート・ストローク・ピストンによるガス圧利用方式で、オープン・ボルト位置から射撃を行い、コッキング・ハンドルはボルトと独立した構造となっています。本銃の本体重量は約4.9kgと非常に軽量ですが、CIS社が独自開発したConstant Recoilと呼ばれるシステムにより、ボルトの反動全てをリコイル・スプリングが吸収する為、射手の負担が非常に少なくなっています。MK3はUltimax 100軽機関銃の中で最も多く運用されているバリエーションで、迅速な銃身交換が可能となっています。MK3の給弾システムは、60/100連の樹脂製ドラム・マガジンの他、銃本体に装着出来るよう一部改修を加えたM16用の20/30連マガジンが使用可能となっています。



ULTIMAX 100 MARK III CAL. 5.56mm
MFG BY CHARTERED INDUSTRIES
OF SINGAPORE PTE. LTD.

写真の銃はすべて無動状態です。

Siamese Mauser Type 46 Rifle

Siamese Arisaka Type 66 Rifle

Siamese Mauser
Type 46 Rifle
シャム モーゼル
46式 小銃



全長 1,248mm
口径 8mm×50R
装弾数 5発



Siamese Arisaka
Type 66 Rifle
シャム 66式小銃
(タイ軍用三八式歩兵銃)



全長 1,247mm
口径 8mm×52R
装弾数 5発



1903年にシャムと現タイ国境で採用した日本製のモーゼル型小銃です。1903年から1908年にかけて東京砲兵工廠小石川工場にて約40万挺が生産され、20年間に亘りシャム、日本総代理店として使用されました。当時小銃の近代化を進めていたシャム国では、ドイツのモーゼル社から最新のM1898型小銃の製造ライセンスを得ることに成功しましたが、国産化は小銃を国産化する能力がなかったため、当時兵器の輸出に積極的であった日本に生産を委ねました。本銃はモーゼルM1898型小銃の準なるライセンスト生産品ではなく、1902年に日本海軍で採用された三十五年式海軍陸戦隊用が追加されている他、リット・ストック内にクリーニングホートを収納するスペースも設けられています。前、本銃の使用弾薬はオーストリアの8mm×50Rマニッパ弾の影響を受けて独自に開発された45×58mm×50R弾となっています。



造り直した状態。タンジエントサイト両側面には「SHAM」20までシャム文字による距離表示が入っています。

1923年にシャム王国軍が新たに採用した8mm×52R弾を使用できるように、日本の三八式歩兵銃を再設計した物で、1923年に5万挺が日本に発注されました。外見はオリジナルの三八式歩兵銃とほぼ同様ですが、6.5mm弾より大型の8mm弾を使用する為、機関部が上下に転位しています。また、三八式歩兵銃ではリア・サイトがブザー・サイトでしたが、66式小銃ではタンジエント・サイトに変更されている他、フロント及びセンター・バンドの固定方法が板バネからネジ留めへと変更されています。本銃には三十年式銃剣に類似した両方の銃剣を装着出来るように、三八式歩兵銃と同様の着剣装置が付いていますが、銃身外径が異なる為、銃剣の互換性はありませんでした。1923年の関東大震災により東京砲兵工廠小石川工場が被害を受けた為、本銃の生産は小倉工廠で行われる事になり、結果的に5万挺の注文に対してシャム軍への納入には5年もの歳月がかりました。



オリジナルの三八式歩兵銃に比べて機関部が上下にやや転位となっています。

写真の銃はすべて無効銃となります。

French Lefauchaux Pinfire Revolver by Lefauchaux a Paris

ルフォーショー・リボルバーは、フランスのカジミール・ルフォーショーによって1830年代によって発明されたピンファイア・カートリッジを使用するリボルバーで、1854年にカジミールの4男であるユージン・ルフォーショーがフランスで特許を取得し、その後まもなく最初のピンファイア・リボルバーであるルフォーショー・モデル1854が市場に投入されました。1857年にフランス海軍がルフォーショー・モデル1854を制式として採用したのを皮切りに、その軍用銃としての価値がヨーロッパの大国やその他多くの国々で認識され、ロシアやスウェーデンでもフランスと同様のモデルが採用されました。本品はフランスのパリにあった本家ルフォーショー社で製造された口径11mmのモデルで、シングル/ダブル・アクションのトリガー・メカニズムを備えています。銃身上面には「E. LEFAUCHEUX BRIE S.G.D.G. A PARIS」のバリ・ルフォーショーの特許刻印が入っています。

French Lefauchaux
Pinfire Revolver
by Lefauchaux a Paris
フランス ルフォーショー
パリ リボルバー



全長 272mm
口径 11mm
装弾数 6発

E. LEFAUCHEUX BRIE S.G.D.G. A PARIS

フランス製の本家ルフォーショー社製の銃身と付いている中車形式の型番は以下に示す通りです。W. H. 10536

Belgian Lefauchaux Pinfire Pocket Revolver

Belgian Lefauchaux Pinfire
Pocket Revolver
ベルギー ルフォーショー
ポケットリボルバー



全長 210mm
口径 9mm
装弾数 6発



シリンダー前面にリージュのブルー・ハバース
社印である円形彫に「E.L.G.-Liege Epreuvée」とある



シリンダーにアルファベットの「E」と王冠のブルー・ハバース社印(コントローラー印)

ルフォーショー・リボルバーはフランスの他にベルギーでも特許が取得され、1860年代から70年代にかけて様々なモデルが製造されました。ベルギーで製造されたルフォーショー・リボルバーは、その多くにベルギー・リージュ(Liege)のブルー・マークや王冠の下にメーカー名のイニシャル等が入った刻印が打刻されているのが特徴です。ユージン・ルフォーショーは、1855年にダブル・アクションのトリガー・メカニズムに関する特許を追加で取得した他、1862年に折り畳み式トリガーの特許をフランスで取得し、その利点を生かしてポケット・リボルバーのようなコンパクトなルフォーショー・リボルバーが製造・販売されました。本品はベルギーで製造された全長約20cmのルフォーショー・ポケット・リボルバーで、護身用に使用された実用的な品です。トリガーは折り畳み式で、シングル/ダブル・アクションのトリガー・メカニズムを備えています。



写真は教育委員会発行の「銃砲刀剣指定証書」に付いた可動する実物の古式銃です。(※可動部分ではありません)

Belgian Lefauchaux Pinfire Revolver by Eugène Lefauchaux



Belgian Lefauchaux Pinfire Revolver
by Eugène Lefauchaux
ベルギー・ルフォオーショール・リボルバー
(ルフォオーショール・ベルギー工場製)

全長 287mm
口径 11mm
装弾数 6発

ルフォオーショール・リボルバーはグリップの形状によって主に3種類に分類されます。セカンド・タイプと呼ばれるモデルでは、グリップ上部が角張った形状となっており、他の2タイプに比べて高品質な仕上げである他、多くの追加部品や小型スプリングを用いた複雑なロック・メカニズムが使用されています。これにより射手はより快適かつ正確に射撃を行う事が可能でした。その複雑な機構と高品質な仕上げのため、セカンド・モデルを製造できたのは一部の高い技術を持った製造業者のみでした。当時セカンド・タイプは他の2タイプと比較してはるかに高価な品であり、富裕層向けの商品であったと考えられています。本品はベルギー・リエージュのブルーフ刻印に加えて、王冠の下にEugène LefauchauxのイニシャルであるELの文字が打たれたルフォオーショール社のブルーフ刻印が入っていることから、本家ルフォオーショールのベルギー工場で製造された品である事が判ります。



ローディング・ゲートを開いてピンファイア・カートリッジの装填を行います。



English Bar Hammer Pepperbox

回転式のシリンダー（弾倉）と銃身が一体となった構造のペッパーボックスと呼ばれる黎明期のリボルバーで、バーハンマー・タイプの撃鉄とダブル・アクション式のトリガー・メカニズムを備えています。ペッパーボックスの名称は形状が「コショウ挽き」に似ている事に由来します。英国製のバーハンマー・ペッパーボックスは、製造年代によってグループI（1835～1840）、グループII（1840年代）、グループIII（1850～1860）に分類可能です。本品は1840年代頃に英国で製造されたグループIIに相当する品で、グリップ下端が丸みを帯びた形状のバグ・タイプ・グリップが装着されています。グループIIは英国の多くのガンズミスにより製造されましたが、ほぼ同一規格になっており、メーカー名を確認しにくい限りは製造者の特定が困難となっています。また、金属部の彫刻はコストを下げるために全体的に彫りが浅く、多くの個体ではセーフティ等の機能が装備されていませんでした。



English Bar Hammer
Pepperbox
英国製 バーハンマー
ペッパーボックス

全長 195mm
口径 9mm
装弾数 6発



写真は所有権者（個人）の所有物であり、複製・転載はできません。写真は所有権者（個人）の所有物であり、複製・転載はできません。

US Sharps
M1863 CarbineUS Sharps M1863 Carbine
シャープス M1863 カービン全長 993mm
口径 .52in.
装弾数 単発

クリスティアン・シャープスによって1840年代後半に設計された、南北戦争時の代表的な後装式単発銃の一つです。用心鉄を兼ねる積弾を備えたアンダー・レバー式で、レバーを下方に操作する事によりブリーチ・ブロックが垂直に下降して薬室が開きます。この状態で薬室後方から紙製もしくはリネン製薬室を装填し、本体右側面に設けられたハンマーによりブリーチ・ブロック上のニップルに取り付けた雷管を撃発する構造となっています。尚、ハンマーの cocking 操作はレバー操作とは別に行います。シャープス銃には製造時期に応じて各種のモデルが存在し、リア・サイト後方の銃身上面にモデル名が打刻されている他、シリアルNo.からもモデル名が推測でき、M1863 カービンはシリアルNo.が75,000から140,000までの概ね65,000挺が該当します。M1863には、バット・ストック右側面に鉄製のコンバートメント（パッチ・ボックス）が設けられたタイプも製造されました。

Albini Conversion
Infantry RifleAlbini Conversion
Infantry Rifle
アルビーニ
コンバージョン 歩兵銃全長 1,250mm
口径 .577in.
装弾数 単発

英国製のエンフィールド P1856短小銃をアルビーニ・システムと呼ばれる方式により後装式に改修した品です。アルビーニ・システムの後装方式はイタリア軍将校Augusto Albiniにより設計され、英国の銃工Francis Braendlinにより完成されました。ブリーチ・ブロックが前部のビンジを軸に上方に開く一種のトロップドア方式となっており、ハンマーと連動したストライカーがハンマーをリリースした際に前方に移動し、ブリーチ・ブロック後部をロックすると同時に撃針を撃発する構造となっています。ハンマーを起こすとストライカーが後方に移動しブリーチ・ブロックのロックが解かれます。日本では明治維新前後に多くの前装式エンフィールド銃がスナイドル・システムの後装式に改修されましたが、少数がアルビーニ式へと改修されました。明治に入ってから新設された大日本帝国陸軍も制式小銃の一つとして577 Snider（ボクサー・ストロン）弾を使用するアルビーニ小銃を採用しました。



写真の銃は教育委員会所有の複製品であり、射撃目的で使用するものではありません。複製品であることを認めます。

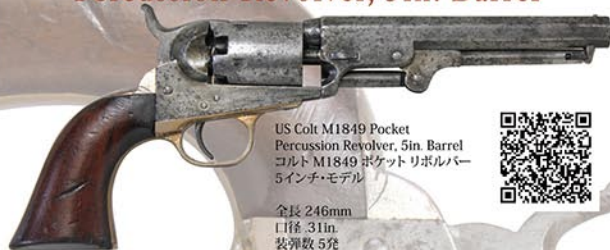
US Colt M1849 Pocket
Percussion Revolver, 6in. Barrel

サミュエル・コルト社で1850年から1873年にかけて製造されたパーカッション・リボルバーです。当時コルト社が生産したパーカッション・リボルバーの中で最も商業的に成功した品で、約34万挺が製造されました。M1851ネービーが軍用として採用されたのに対し、M1849ボケットは主に民間用として販売されました。シンダー表面には戦馬車と戦馬車強盗による戦場シーンのエングレービングが施されています。コルト社製パーカッション・リボルバーの特徴として、銃身後部のバレル・ウェッジと呼ばれる楔（くさび）状の部品を押し出す事により、銃身とフレームがシンダーを挟むように前後に分解出来る構造になっています。M1849ボケット・リボルバーは全て31口径ですが、5連発及び6連発の二種類が製造された他、銃身長が3、4、5、6インチのバリエーションが存在します。その中でも6インチ・モデルの生産数は少数にとどまりました。

US Colt M1849 Pocket
Percussion Revolver,
6in. Barrel
コルト M1849 ボケット
リボルバー 6インチ・モデル



全長 273mm
口径 31in.
装弾数 6発

US Colt M1849 Pocket
Percussion Revolver, 5in. Barrel

US Colt M1849 Pocket
Percussion Revolver, 5in. Barrel
コルト M1849 ボケット リボルバー
5インチ・モデル



全長 246mm
口径 31in.
装弾数 5発



フレームの前方左側面に「COLTS PATENT」の刻印



銃身上部のコルト・アドレス刻印は
「ADDRESS SAMUEL COLT
NEW YORK CITY」

と二行に亘って入っている初期のM1849に見られる表示となっています。



コルトM1849ボケット・リボルバーには製造時期によって刻印や部品形状等に見られます。初期生産品では当時New Yorkに所在していたコルト社のアドレス刻印が銃身上面に二行に亘って入っています。初期生産品の内、アドレスがNew YorkからHartfordに切り替わるまでの比較的後期の製品（シリアルNo.71000以降）では、NEWとYORKの間に打たれていたハイフンが省略されました。フレームとローディング・レバーを固定するネジは、シリアルNo.153000以前の生産品ではネジの頭が側面に飛び出したタイプとなっています。また、銃身先端下部に設けられたローディング・レバー・キャッチについても初期生産品では後期のものに比べてやや小型の形状となっています。尚、シリアルNo.11600以降の製品ではハンマー基部にローラーが追加されました。その他、トリガー・ガードや銃身基部右側面のバレル・ラグ・カットアウトと呼ばれる切り欠きの形状等にも製造時期により違いが見られます。



写真の銃は教育委員会発行の「銃器の知識と歴史」に掲載されている可動する銃器の古式銃です。（許可無効でより詳しく）

US Sharps & Hankins M1862 Carbine, Army Model

US Sharps & Hankins
M1862 Carbine, Army Model
シャープス&ハンキンズ
M1862 カービン
アーミー・モデル



全長 994mm
口径 13mm
装弾数 単発



南北戦争中にフィラデルフィアのシャープス&ハンキンズ社で約8,000挺のみ製造された、.52口径のリム・ファイア弾を使用する単発後装式騎兵銃です。本銃の後装システムは、シャープス・カービンを設計したクリスティアン・シャープスにより設計されたもので、本体下部のレバーを下方に操作する事により、銃身が前方にスライドして薬室後部が大きく開きます。装填後にレバーを戻すと銃身が後退して薬室が閉まり、レバーがロア・タンク基部のロックにより固定されます。また、フレイム後端の拳銃左側面にはスライド式の安全装置が設けられています。シャープス&ハンキンズ・カービンは当初海軍向けに設計され、銃身を塩害から守る為に革製のカバーが装備されていた。その後、南北戦争の激化により陸上兵器が不足した事から、約500挺が陸軍にも納入されました。この陸軍向けモデルには革製のカバーが当初から取り付けられていませんでした。

US Springfield M1865 Trapdoor Modified Carbine

US Springfield M1865
Trapdoor Modified Carbine
スプリングフィールド
M1865 トラップ・ドア カービン



全長 1,040mm
口径 12mm
装弾数 単発

スプリングフィールドM1865は、前装式のスプリングフィールドM1861やM1863ライフル・マスカットをベースに、リム・ファイア弾を使用する後装式へと改修したモデルです。その後装システムは、ブリーチ・ブロックを上方に跳ね上げて弾薬の装填・排莖を行う形態からトラップ・ドアと呼ばれました。M1865は複雑な構造に起因する問題が生じた為、その後排莖機構等の構造を簡略化して.50口径のセンター・ファイア弾薬を使用出来るようにしたM1866が登場するとすぐに置き換えられました。本品はリム・ファイア式のM1865ですが、口径は銃身内にライナーを追加する事により.50口径に変更されています。これは当時世界で比較的に流通していた.50.70リム・ファイア弾を使用出来るように試験的に改造されたものと思われます。南北戦争終結後、多くの余剰火器と共に少数が試験的に製作された銃や制式採用されなかった改造品が米国から明治維新時の日本に輸出されました。

写真の銃は教育委員会が所有する「明治期に製造された」と記された可動する実物の古式銃です。(写し可動銃ではありません)

US Winchester M1866 Carbine, 2nd Model

US Winchester
M1866 Carbine, 2nd Model
ウィンチェスター M1866
イエローボーイ カービン
2nd モデル



全長 991mm
口径 10.5mm
装弾数 11発



壬申一八三三 武蔵前



ウィンチェスター社が1866年にヘンリー・ライフルの欠点であった弾倉を改良し、フレーム右側面のローディング・ゲートから装填できるようにした上で、ハンドガードを追加する等の改良を加えて開発したレバー・アクション・ライフルです。フレーム全体が真鍮製である事から一般に「イエローボーイ」と呼ばれる他、フレーム左側面に鉄を被（サドル）に固定する為のリングが装備されている事からサドル・リング・カービンとも呼ばれます。本品は1868年に製造されたウィンチェスターM1866カービンの2ndモデルです。M1866は1stモデルから4thモデルへと改良されるに従って、フレーム後部の傾斜がならかな形状となりますが、本品のフレーム後部の形状は2ndモデル特有のやや傾斜の付いたカーブとなっています。また、シリアルNo.が23,000までの初期生産品では、リア・サイト前方の鉄身上面に伝統的なヘンリーの特許印が刻されているのも特徴です。

トリガー・ガードを兼ねるアンダー・レバーを下げると、ボルトが後退してハンマーがコックされます。

Single Shot Percussion Navy Pistol by Ketland & Co.



Single Shot Percussion
Navy Pistol
by Ketland & Co.
Ketland & Co.製
パーカッション
ネービーピストル



全長 343mm
口径 15mm
装弾数 単発



SHARPE
EXTRA
PROOF



鉄身上面のベルギー・リエージュ
(楕円形の中にE.L.G.-Large
Epreuveの文字と星のマーク)の
ブルーフ刻印

Thomas Ketland社によって製造された単発の前装打撃式拳銃で、鉄身に「Ketland & Co.」の刻印が入っています。Thomas Ketland社は1760年に英国バーミンガムで創業した銃器メーカーで、当初はフリントロック・ピストルを主に製造して成功を収め、1790年頃には輸出市場にも事業を拡大しました。本品の鉄身上面にはベルギー・リエージュのブルーフ刻印が入っていますが、これは英国で製造された後、ベルギーのブルーフ・ハウスに持ち込まれて打刻されたものと考えられます。Ketland社は1821年に廃業していますが、本品は撃発方式がフリント・ロック式ではなく管打撃式である事から、同社の製品の中でも最後まで製造された品です。本品の鉄身は真鍮製で、八角形のオクタゴン・バレルとなっており、表面に彫刻などの施されていないプレーンなタイプとなっています。また、フロント・サイトやリア・サイトは元々付いていないデザインとなっています。



写真左側は教育委員会発行の「銃器の対価管理」に引かれた実物の古式銃です。(真贋鑑定ではありません)

Japanese Military Matchlock Gun

Japanese Military Matchlock Gun
火縄銃 六匁玉軍用抱筒



全長 1,035mm
口径 16.8mm
装弾数 単発



軍用抱筒と呼ばれる口径16.8mmの火縄銃で、軍用らしく質実剛健かつ飾りの少ないシンプルなデザインで堅牢な設計となっています。軍用抱筒では一定の破壊力を得る為、本品のように六匁玉(16mm)から十匁玉(19mm)程度の品が多く見られます。本品は口径に対して全長が1,035mmと比較的に短く、軍用筒に特徴的な機動性を考慮したデザインも見取れます。銃身にはよく鍛えられた精良な鉄が使用されており、銃口部分にはやや短い八角柑子が設けられています。果口(銃口)は2mmほど奥まった位置に本果口のある二段果口となっています。カラクリは内カラクリ(置目カラクリ)で、三角形の引き金には用心金は設けられておらず、銃床下部の銃把部分にナマコ金と呼ばれる強度を増すための真鍮製の部品が取り付けられているのも本品の特徴です。目釘穴は台(銃床)に直接穴を開けた構造で金具は取り付けられておらず、こちらも軍用筒らしいシンプルな作りとなっています。

Japanese Pill-lock Carbine

信州松代の銃工であった片井京助直繼が文政年間(1819-1828)に製作した早打銃砲を天保年間に更に発展させて考案したと言われる。雷粒薬を使用して撃発を行う雷火銃の一種です。銃身右側面には特徴的な真鍮製の雷粒ケースが設けられており、ケース先端部分を後方に押し込む事により火蓋が開き、雷粒ケース内から雷粒が火皿に入る構造となっています。火蓋の内部には撃針が設けられており、発射時には撃針が火蓋の上面を叩く事によって火蓋内部の撃針が雷粒を撃発する構造となっています。本銃には迅速な連続射撃を行う為の工夫が随所に見られ、鉄把右側面に設けられた板状のレバーを押し下げる事により、銃を持ち変える事なく撃針のコッキング操作を行う事が可能です。また、銃口部は特殊な漏斗型となっており、弾薬を迅速に装填する事が可能となっています。銃口先端下部には回転式の真鍮製かるか(さく枝)が縦番によって取り付けられています。



Japanese Pill-lock Carbine 全長 953mm
傍装雷火銃 口径 14mm
装弾数 単発



写真の銃は教育委員会発行の「軍用兵器管理証」に付いた可動する実物の形式図です。(許可と承認ではありません)

Q:買取り査定後

1カ月以内であればいかなる状況でも
査定金額は変わりませんか？

A:ヤフオク等に出品して未落札になった
場合等、査定後1カ月以内でも紳士的
でない場合はその限りではありません。

Q:シカゴでこれまで入
荷した事のない銃のリクエ
ストは可能ですか？

A:多くのリクエストがあり人気の銃は、現
在入荷が難しい品もありますが仕入れに努
めており、入荷時にはご予約順で案内します。
人気が高い銃の場合、1挺のみの仕入れとなり販
売価格が高額になる他、入荷後キャンセルされた場合
の販売が難しいため前金を頂く場合があります。
入荷の可能性が極めて低い品はご要望に
添えない事もあります。

Q:シカゴで販売され
ている商品について、
詳しく解説した動画などは
ありますか？

A:2018年9月からYouTubeのシ
カゴレジメンタルズ公式チャンネルに
て、弊社商品を詳しく解説した動画の公開が
はじまりました。概ね月1回のペースで新た
な商品紹介動画をアップしております
ので、ぜひご覧ください。

Q:ヤフオクな

どに出品する際にシカゴHPの解説や画像
を流用しても良いでしょうか？

A:ガゼットVol.15のQ&Aにも記載しておりますように、弊社HPや
ブログ、Detailed Photos等に掲載のテキスト（解説文）並びに画
像につきましては、お買い上げいただいたご本人様であっても無断
使用はお断りしております。

Q:シカゴHPの商品
注文フォームのお支払い方
法で選択できるPayPalとはどの
ような支払方法ですか？

A:PayPalはウェブ上で商品代金のお支払いが行える安全で
スピーディーな決済方法です。PayPal決済を選択された場合、弊社より
PayPal決済用のご請求メールをお送りしますので、
メール画面の指示に従って決済お手続きをお願いし
ます。また、PayPalアカウントをお持ちでない方
でも同様にウェブ上でクレジットカード決済
が可能です。

買取ります！

ステップ1

まずはお電話ください。03-5818-1123

弊社よりお買い上げ頂いた品は状態が販売時と同じであれば販売価格の最低30%を保証します。

宅配便での送品、お持ち込みどちらでもOKです。
梱包材料の無い方は専用段ボール箱をお送り致します。

ステップ2

査定をさせて頂きます。

今まで弊社で査定した品のほぼ100%の高額が成立しています。それだけ弊社の査定には満足頂いております。※査定の有効期間は1ヶ月です。

買取・下取前提の査定は無料です。お気軽にお電話ください。

即日、貴方の銀行口座にお振込致します。

大量にある場合は
全国どこでも
出張買取致します。

◆買取/下取りのご案内◆

買取・下取りの際は身分証明書のコピーを頂きます。ご来店の際は、必ず身分証明書(運転免許証、健康保険証、パスポート等)をご持参ください。宅配/郵送にて商品をお送りいただく場合は、身分証明書のコピーと買取代金のお振込口座情報(名義人、銀行名、支店名、口座の種類、口座番号)を明記のうえ同封してください。

●買取について

1. 弊社よりお買い上げ頂いた品は状態が販売時と同様であれば無条件で販売価格の最低30%を保証し、最高200%以上で買取致します。平均買取価格は、種類や相場によって変わりますが、最近では平均50%程度です。お電話での大まか査定も出来ます。お気軽にお問い合わせください。販売価格は税別価格になります。
2. 他店から購入された品であっても、正規販売店であれば買取可能です。他店からの購入品は品を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額はそれを約束もしくは、保証するものではありませんのでご了承ください。その際は購入店名(輸入業者名)をお知らせください。必ず身分証明書(運転免許証、健康保険証、パスポート等)をご持参ください。宅配/郵送で弊社へ直接送られる方は身分証明書のコピーを同封してください。
3. アクセサリー、軍服、書籍等の場合は買取が出来ない場合もございますので、事前にお問い合わせください。
4. 正式査定には品を宅配便でお送りいただくか、東京・大阪へ直接お持ち込みください。梱包材料がお手元に無い方は専用段ボール箱を無料でお送り致します。この場合、査定品を弊社までお送りいただく際の送料はご負担していただきます。
5. 店頭買取及び宅配買取の場合、買取が成立した後(代金の振込み後)のキャンセルは出来ません。あらかじめご了承ください。

●下取りについて

1. 下取りの条件は基本的に買取と全く同様ですが、買取買取価格よりも5%高く評価させていただきます。ご購入予定の品によっては10%から30%買取価格よりも高く評価出来る事もありますので、ご相談ください。
2. 下取り品の代わりに購入される品が下取り品の価格より低い場合の査定は、買取価格と同等となります。
3. 下取り品の代わりに購入される品の返品は、弊社規定の返品期間内であれば他の品との交換が可能です。但し、返品してキャンセルになった場合の査定額は買取価格と同等となります。

ご来店のお客様へ

※弊社は世界で最も多種の小火器を展示販売している無動実銃の専門店です。一般的な品は数多くの中からお選びいただけるように、種類につき数銃ずつ在庫を用意していますので、ぜひご来店いただき、ご自身の目の品をお確かめください。希少価値の高い品につきましては一品物もございますので、遠方よりご来店の際は予めお電話で在庫状況をご確認ください。

※東京上野本店、大阪店ともに年中無休です。(年末年始を除く)

営業時間は12:00より東京店19:30、大阪店20:00までです。(お会計は閉店30分前まで)

※各種クレジットカード(VISA、Mastercard、JCBとその提携カード(Amex、Dinersなど)、Nico's、Orico)を取り扱っています。(分割2回、ボーナス払い等ご利用いただけません。)

※オリオン・ロープの店頭即決ローン(Oricoローン)も取り扱っております。ローンをご希望の方は口座番号、銀行印と身分証明書(運転免許証、健康保険証等)をお持ちください。

※重機買取をお求めのお客様で簡易包装でのお持ち帰りをご希望される方には、販売価格より1万円サービスさせていただきます。(プロセシングM1919 A4機関銃など、対象外の品もありますので、お会計の前にご確認ください。)

通信販売をご利用のお客様へ

- ①お電話(TEL:03-5818-1123)、またはメール(chicago@regimentals.jp)にてご注文を受けております。
- ②弊社HPからのご注文も承っております。ご希望の商品ページにある「ご注文受付はこちら」からご注文フォームをご送信ください。シカゴレジメンタルス <http://www.regimentals.jp>
- ③ご注文受付後、在庫を確認した上で折り返し弊社よりご連絡致します。なお無動実銃の送料は弊社でサービスさせていただきます。
- ④お支払い方法は下記の通りです。ご送金またはご入金いただいた場合は確認の為に、必ずお電話またはメールにて東京上野本店まで早急にお知らせください。(送品業務を円滑にするのと同時に事故を防ぐためにも宜しくお願い致します。)

◆銀行送金の場合

三井住友銀行 江坂支店 普通口座296764 名義人 株式会社シカゴレジメンタルス
ゆうちょ銀行 記号10130 番号87425981 名義人 株式会社シカゴレジメンタルス

◆現金書留の場合

〒110-0005 東京都台東区上野1-12-7 (The シカゴビル)
株式会社シカゴレジメンタルス TEL:03-5818-1123

◆クロネコヤマト コレクトサービス(代金引き替え)の場合

14:00までにご注文を頂ければ一部地域を除き翌日配達が可能です。
※返品の場合は送料の他に代引手数料もご負担いただきますのでご了承ください。

(注)銀行へお振込み頂いても15:00を過ぎると翌日入金となる場合もございますので、その場合は翌日発送となります。

★通信販売の送料・代引手数料について

- ※ご購入金額が3万円(税込)以上の場合は、送料・手数料ともにサービスさせていただきます。
- ※ご購入金額が3万円(税込)未満の場合は、500円の送料をご負担いただいております。また、コレクトサービス(代金引き替え)の場合は、送料500円+代引手数料500円=合計1000円をご負担ください。

◆クレジットカードでお支払いの場合

通信販売でも店頭とほぼ同じ各種クレジットカードをご利用いただけますが、一部ご利用いただけないカードがございますので、お問い合わせください。

◆Oricoローンをご利用の場合

通信販売でもOricoローンをご利用いただけます。簡単な手続きで分割払いが可能です。また金利もクレジットカードより低くお得です。(分割回数数は、webお申し込みで3回～60回、専用用紙記入によるお申し込みが6回～60回となります。)

◆PayPalでお支払いの場合

在庫確認の上送りますPayPal決済用メールの内容をご確認の上、PayPal決済手続きをお願いします。

⑤ご注文いただいた品が店頭在庫とある場合は、ご送金・ご入金確認後、または決済完了後に宅配便にて発送致します。

※弊社取り扱いの商品は書籍とスコープを除き全て返品が可能ですので、通信販売でも安心してご購入いただけます。もし商品にご満足いただけない場合は、商品を受け取ってから7日以内にご連絡のうえ、ご返金ください。お送りいただいた金額より送料、各種手数料(代引手数料・振込手数料など)を差し引いた金額を返金致します。(但し、古い品で返品は常例的な回数でお願い致します。)

●ご不明点がありましたら東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。

古式銃の買取り、下取りについての流れ

◆まずは、ご確認ください◆

1. 各都道府県の教育委員会が発行した「銃砲刀剣類登録証」が付いた合法的に所持ができる古式銃のみを買取り致します。

「銃砲刀剣類登録証」がない古式銃(例えどのように古いタイプの銃であっても)の買取りはできません。

- *「銃砲刀剣類登録証」を紛失された方は「再交付」、新しく発見された古式銃については「発見届」から「登録審査」までのアドバイスを致します。*「再交付」もしくは「登録」の保証をするものではありません。
- *「銃砲刀剣類登録証」が交付されてから弊社で買取りを行います。
- *明治以降の品(真正拳銃に該当する物)につきましては、古くても古式銃とは見なされませんので、上記説明に沿うことはできません。

銃砲刀剣類の登録証サンプル



昭和34年交付

昭和48年交付

平成2年交付

◆ご注意ください◆

2. 稀に「銃砲刀剣類登録証」が付いていても、古式銃現物と「登録証」が一致しない場合もあります。この場合は教育委員会での「再審査」が必要となります。古式銃現物と登録証が一致しているかご確認ください。

◆お問い合わせください◆

3. 買取り可能な登録証付き古式銃であれば、お電話またはメールで、銃名(モデル名)、登録証情報、購入金額、購入時期、商品のコンディション(動作するか否か、欠品がないか)、付属品の有無、買取り希望金額をお伝えいただければ、大まかな査定が出来ます。
- また、火縄銃の場合はモデル名などがないので、写真など査定判断が出来るものをお送りください。
- まずはお気軽にお問い合わせください。

◆査定いたします◆

4. 古式銃の現物と登録証を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額は、それを約束または保証するものではありませんのでご了承ください。
- 正式査定には品を宅配便等でお送りいただくか、大阪、東京店へ直接お持ち込みください。
- これから先は前ページの「無可動実銃の買取り/下取りのご案内」をご参照ください。
- *古式銃の付属品のみのお買取りは基本的には出来ませんが、品によっては可能な場合もありますのでお問い合わせください。ただし、銃と一緒に付属品(特にオリジナル木箱など)を買取りいただける場合はプラス評価をさせていただきます。
- *古式銃現物と登録証は必ず一緒にお送りください。

●ご不明な点がありましたら東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。

無可動実銃について

無可動実銃とは実物の銃に対して発射機能を排除する加工を海外で施し、装飾用として合法的に輸入された品です。

輸入された時期によって多少の違いはありますが、下記の加工は最低限施されているのが無可動実銃の条件です。

- *銃身内部に鉄製のインサートが銃口から薬室まで挿入されており溶接によって抜けなくなっていること。
- *薬室と銃身にスリットが入っていること。
- *薬室は溶接によって塞がっており装填は出来ないこと。
- *ボルトの一部若しくは半分を除去して使用不可能にし、機関部本体に溶接で固定されていること。
- *引き金を除く、トリガー・メカニズムの一部、若しくは全てを取り外していること。平成10年以降に輸入された品より厳しい加工が施されております。

古式銃砲について

下記の銃砲刀剣類所持等取締法第十四～十八条(抜粋)に基づき、教育委員会によって「銃砲刀剣類登録証」が交付された古式銃は合法的に所持が認められています。

第十四条 都道府県の教育委員会は、美術品若しくは骨とう品として価値のある火縄銃銃砲等の古式銃砲又は美術品として価値のある刀剣類の登録をするものとする。

- 2 銃砲又は刀剣類の所有者(所有者が明らかでない場合に於ては、現に所持する者。以下同じ。)で前項の登録を受けようとするものは、文部科学省令で定める手続により、その住所の所在する都道府県の教育委員会に登録の申請をしなければならない。
- 3 第一項の登録は、登録審査委員の鑑定に基づいてしなければならない。
- 4 都道府県の教育委員会は、第一項の規定による登録をした場合においては、速やかにその旨を登録を受けた銃砲又は刀剣類の所有者の住所を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。
- 5 第一項の登録の方法、第三項の登録審査委員の任命及び職務、同項の鑑定の基準及び手続その他登録に関し必要な細目は、文部科学省令で定める。

(登録証)

第十五条 都道府県の教育委員会は、前条第一項の登録をする場合には、登録証を交付しなければならない。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を所持する者は、登録証を亡失し、若しくは盗み取られ、又は登録証が滅失した場合においては、文部科学省令で定める手続により、速やかにその旨を当該登録の事務を行った都道府県の教育委員会に届け出てその再交付を受けなければならない。
- 3 登録証の様式及び再交付の手続は、文部科学省令で定める。

(登録を受けた銃砲又は刀剣類の譲受け、相続、貸付け又は保管の委託の届出等)

第十七条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、若しくは相続により取得し、又はこれらの貸付け若しくは保管の委託をした者は、文部科学省令で定める手続により、二十日以内にその旨を当該登録の事務を行った都道府県の教育委員会に届け出なければならない。貸付け又は保管の委託をした当該銃砲又は刀剣類の返還を受けた場合においても、また同様とする。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を試験、研究、研ま若しくは修理のため、又は公衆の観覧に供するため貸し付け、又は保管の委託をした場合には、前項の規定にかかわらず、届出を要しない。
- 3 都道府県の教育委員会は、第一項の届出を受理した場合においては、速やかにその旨を当該届出に係る銃砲又は刀剣類の所有者の住所を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。

第十八条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り渡し、貸し付け、若しくはこれらの保管を委託し、又はこれらを他人をして運送させる者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、借り受け、又はこれらの保管の委託を受ける者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。
- 3 何人も、当該銃砲又は刀剣類とともにする場合を除いては、登録証を譲り渡し、又は譲り受けなければならない。

Chicago *Regimentals*
Tokyo Ueno Headquarters
Osaka Kawaramachi branch office

www.regimentals.jp

